
コードギアス 反逆のルルーシュ ~銀の翼~

じゅげむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 反逆のルルーシュ ～銀の翼～

【Zコード】

Z1377Z

【作者名】

じゅげむ

【あらすじ】

神聖ブリタニア帝国の植民地となつた旧日本・エリアー。そこで極秘裏に行われていた実験。しかしある日、C.Cの入ったカプセルが盗まれると同時に、その極秘研究所から脱走した2人の少年レイと少女ジル。レイは過去も未来も捨て、ただ己が望むがままに生き、ジルは己の過去を拾いながら未来を生きる。あまりにも対照的な2人の人間…。彼らはいつたい何者なのか…?そして彼らが関わる世界の行方は?コードギアスのもつ一つの物語。／基本4日更新／

STAGE 00 【プロローグ】

【旧日本・エリアー・極秘研究所】

「くつ・くつ・くつ！例のカプセルが奪われたっ！！急げっ！！なんと
しても取り返すんだっ！！」

研究所内ではけたたましいアラーム音と、それに負けじと声を張り
上げる軍人の姿があった。

彼の名はバトレー。

神聖ブリタニア帝国第3皇子クロヴィスの命で、ここに管理、隠蔽

をしている将軍であり科学者でもある。

「・・・殿下にお伝えせねば・・・・・・」

バトレーの顔には焦りの色が浮かんでおり、その事態の深刻さがう
かがわれる。

そうして彼は踵を返し、その研究所を後にしようとした。
しかし突如奥の一室が爆発した。
驚いて彼は振り返った。

「なつ・・・・・まさかつ・・・・・！」

バトレーの顔の焦りは瞬く間に恐怖へと変わる。

そしてその爆発音を聞きつけた十数人ほどの兵士が銃を構えて駆けつけた。

するとその爆煙から姿を現したのは、銀髪で綺麗なアメジスト色の瞳をしている全裸の2人の少女と少年だつた。
しかし田はどこか虚ろで、まるで心がない人形のようだつた。

「ああ・・・そんな・・・・・まだ不完全だと言つのに・・・」

バトレーは絶望的な声を出して思わず後ずさつた。

その様子を見た兵士たちは、あの2人がどんな人間かはわからなかつたが、相當まずいものだということは理解できた。
すると突然彼らは何かにとりつかれたように、床に落ちていた鋭いガラス片をひとつつかみ、兵士たちにむけて走り出した。

「うつ・・・うて！・・・うてえつ――！」

バトレーはそう命令すると、いちもくさんに走つてその場を立ち去

る。

目の前の2人に無我夢中で発砲する兵士はそれに気がつかない。しかも2人はその銃弾に当たっても何事もないようじこちらに突っ込んでくる。

「なつ……なんで死はないんだああああつ……！」

その光景に兵士たちは恐れを抱き、後ずさりをしながらさらに発砲を加える。

そして2人は彼らの元へ行き着くと、次から次へと手に持った鋭利なガラス片で彼らの喉元を掻き切っていく。

「やつ……やめてくつ……があ……」

その場で何度も悲鳴があつた。

数分後、いつの間にか辺りは血の海と化し、兵士は皆息絶えていた。

そして2人は何事もなかつたかのようにその場を後にした。

STAGE 01 【名もなき少女】（前書き）

誤字・脱字の指摘お願いします。

STAGE 01 【名もなき少女】

【トカキヨウ租界 アシュフォード学園】

「はあ・・・はあ・・・

一人の少女が所々血に染まった白衣のみをまとつて走っていた。
彼女は銀色の髪をなびかせ、何度も後ろを振り返り、まるで何かから逃げているようだ。

とにかく遠くへ・・・

その考えだけが今の彼女を突き動かしていた。

しかしそんな彼女を突如めまいと頭痛が襲い、その場で思わず立ち止まり嘔吐し、そのまま彼女は倒れ込んでしまった。
視界が霞み、意識が遠のいていく・・・
そして彼女は意識を失った。

数時間後……

「ん・・・ん・・・・・・・・」

彼女がゆっくりと目を開けると、そこは見知らぬ天井だった。辺りを見渡すが、ここがどこだかわいっぱいわからない。

部屋は質素で、きちんと物が整理整頓されている。
クローゼットに掛かっている服からすると、どうやら女性の部屋のようだ。

そして彼女はベッドから起きあがると、窓辺へと歩み寄り、そこから外を眺めると、学生らしき人たちが楽しそうに話しながら歩いていた。

すると突然その部屋のドアが開いた。

「ちよつ……あなたそんな格好でつ……」

「えつ……？」

自分の体を見ると、なぜか全裸だったが、彼女は全く気にしている

様子はなかつた。

あわてて彼女に駆け寄る金髪の女性・ミレイ・アシュフォードは、部屋のカーテンを閉めた。
彼女の手にはバスローブがあり、どうやらこれを取りに行っていたらしい。

「ダメじゃない！まだ安静にしてなくちゃ。」

「あつ・・・せー・・・アリセム!」ですか?」

自分にバスローブを着せて、強引にベットまでひっぱり寝かしつけるミレイに、彼女は訪ねた。

「ここはアシュフォード学園のクラブハウスよ・・・あなた名前は？どこからきたの？」

• • • • • • • • •

思わず彼女は考え込んだ。
なぜかうまく思い出せない・・・
いつたい自分は何なのだろうか？

「名前は・・・ジル・・・・でもそれ以外は思い出せないんで

す

「もしかして記憶喪失？」

「たぶん・・・」

「そ、う・・・・フアミリー・ネームは？」

「・・・わかりません・・・・・」

「そつかあ・・・あつ、ちなみに私はミレイ・アシュフォードー、この学園の生徒会長兼理事長の孫娘！よろしく！」

ミレイは明るい笑顔をジルに向けながら言つた。

どうしてこんな自分をここまで世話してくれるのか彼女は不思議だつたが、それをきくのは何故か失礼のような気がしたので、きくのはやめた。

「あの・・・私はどうしてここへ？」

「あなたはね、血だらけの白衣だけを着て学園の庭に倒れていたのよ？ あなたに怪我はないようだけど・・・覚えてない？」

「いえ・・全然・・・」

怪我がないのに血まみれ？

じゃあ自分はだれかを殺してしまったのか？

そんな考えがジルの脳裏によぎる。

もしそうだとしたらこんなところにはいられない。

このミレイという人にも迷惑をかけてしまう・・・

そして彼女はここから立ち去る旨むねを伝えようとすると、それより先にミレイが口を開いた。

「心配しなくても大丈夫よ・・一応警察には届け出たし、確認も取つたからあなたが犯罪に関わっていたという事実もないわ」

ミレイは優しい声で、彼女の頭を撫でながら言った。

ジルはそれを聞いて安心した。

その様子を見たミレイは、突然話を切り出した。

「ジル、あなた行くところがないならどう? ここに住んで学校に通わない? どうせ身元受け人も必要だし、御爺様にも話はしておくから」

「いや・・・私は・・その・・ミレイさんやこの学校の人たちにも迷惑がかかってしまうかもしれませんし・・・」

「いいのよーそんなこと気にしなくてーあなたは悪い人には見えないしね?」

そうじつミレイはウインクを飛ばす。

正直ジルは戸惑っていた。

自分がいることで、ミレイや、この学園の人たちに迷惑がかかるかもしれない。

だがここを出たからといって行く当てもなく、記憶もないためどうしたらいいかわからない。

そんなことを悩んでいると、それを察したようミレイは言へ。

「あなたの記憶が戻るまでここにいればいいし、もしあなたが望むなら、記憶が戻った後もここに居ていよいよ?」

彼女はベットに腰掛けてたジルの隣に座りながら肩を軽く叩く。こんな優しい人に拾つてもらつて良かつたと彼女は思いながら、「はい」と少し笑つて返事をした。

「よろしくーじゃあ今からどうする?」
「?」

ミレイは満足そうに大きくうなづくと、そつ提案した。

「いえ、もう大丈夫ですし・・・それに動いてた方が今は気がまぎれますんで・・・」

「そうね・・・それなら一緒に今から生徒会のみんなに会いに行かない? 丁度一人を除いてみんなクラブハウスにいるし、私も付きつきりつて訳にもいかないから、勝手がわからないあなたの世話を頼めるしねつ?」

「そんなつー旨さんに迷惑ですし・・・」

「いいのいいのー会長命令だからー。」

そういつでミレイはいたずらっぽく笑った。

そしてジルは「（きっとみんなこの人で大変な思いをしてるんだろうなあ）」と思うのであった。

そんな中突然部屋の扉が開いた。

「あの・・・ミレイさん・・・先ほどの女性の方の具合はどうですか?」

「せつも田を覚ましたといひよ、ナナリー」

それを聞いたナナリーは「そうですか」と呟つて、車椅子を部屋の中へ進めた。

「あなたは・・・？」

ジルが首を傾げてたずねる。

「私はナナリー・ランペルージです、よろしくお願ひしますね？」

「・・・私はジル・・・よろしく

「はいーといで兄のベットで良かつたのですか？私のベットの方が・・・」

「いいのーいいのーナナリーは気にしないー！」

ミレイはなにやら一矢一矢していたが、ジルとナナリーがそれに気がつくことはなかった。

そしてジルはナナリーの特別な雰囲気を感じ、たずねようか迷ったが、後々に何か不都合があつてはいけないので、思い切ってきいてみた。

「あの・・・ナナリー・・・あなたは・・・」

「はい・・・私は目と足が不自由なんです・・・」

ナナリーは、ジルがたずね終える前にそれを打ち明けた。
そんな彼女の表情はやはり暗く、悲しい物だった。

「そう・・・私にできる限りなうへくらでも手伝ひから、よかつたら頼つてね？」

ジルは笑顔でナナリーにそう言つてしまい、自分らしくないなと思つたが、記憶がなく、自分を知らないのに、そんな風に感じたことが不思議だつたが、嬉しそうに「はい！」と笑顔でうなずく彼女を見て悪い気はしなかつた。

そしてそんな中ミレイが突然話に割り込んできた。

「やうよナナリー、ジルも今日からここに住むんだから」

「えつー？」

思わずナナリーとジルがハモる。

「ナナリーもルルーシュ以外に誰かいた方が楽しいでしょ？」

「それは……そうですねけど……」

「部屋はもう一つあるし、ルルーシュには私から説明しておくれ、それに彼女は記憶喪失で行くあてがないのよ」

「記憶喪失……？ そりなんですか……あの、こんな私なんで迷惑がかかると思いますが、よろしくお願ひしますね？」

「えつ……？ あつ、よろしくお願ひします……」

勝手に進んでいく話を止めるすべはなく、ジルは少し困ったが、別に不満なことはなく、むしろありがたかったので、その提案を受けることにした。

「じゃあ今から生徒会室に行くけど、ナナリーは？」

「やつですね……特に用事もないのでは」と一緒にします

「なら決定つ！ 生徒会室にレッツ・ゴー！」

「じゃあナナリーの車椅子は私が押すね？」

「あっ、はい、お願ひします」

なぜかハイテンションなミレイを先頭にして、ジルはナナリーと車椅子を押しながら部屋を出た。

そしてその夜にルルーシュがベッドで寝ようとすると、なぜか良い匂いがしてなかなか寝付けなかつたというのはまた別の話・・・

【クラブハウス・生徒会室】

「ねえ・・・むつきの子、大丈夫かなあ？」

「シャーリー心配しそうだつて、怪我は別になかつただんだろ?」

「うん・・・でも服は血だらけでまるで撃たれたみたいにたくさん

穴が空いてたし・・・

「そんな穴だらけになるほど撃たれてたらその子とつぐに死んでるつて！」

「・・・そうだね」

ここはアシュフォード学園生徒会室。

その中でオレンジ色の髪の少女、シャーリーと、青い髪の少年、リヴァルが、数時間前に見つけた少女について話していた。

発見者はシャーリーで、その後、ミレイと一緒にルルーシュの部屋に（半ばミレイの嫌がらせで）運んだのだ。

ちなみにシャーリーはその時、ルルーシュの部屋に全裸で寝かせた少女を羨ましいとか思つたり、なにか興奮したりで、いろいろと悶々としていたというどうでもいい情報も付け加えておこう。

一方リヴァルはルルーシュに置いてきぼりにあい、一人寂しくバイクを押していくのであった。

「でもその人危険じゃないの・・・？」

近くの別の机でパソコンのキーを叩いていた緑色の髪をしたメガネをかけた少女、二一ナが不安そうに2人にきいた。

「一応警察には届けたし、それにそんな事件は起つてないって言

つてたから大丈夫だよ。」

「うん……」

シャーリーの言葉を聞いて安心した一ーナはホッとした。
そしてそんな時、部屋の扉が開き、ミレイが入ってきた。

「会長！あの子は…？」

「大丈夫よ、さっき田を覚まして今ここにいるわ…入ってきていいわよー？」

そういうつてミレイが呼びかけ、一步右に寄ると、その後からナナリーのと車椅子を押しながら、バスローブを着た銀髪のアメジスト色の瞳をした少女が入ってきた。

それを見たりヴァルは「わあお…」と慌てしそうに見とれていた。

「私、シャーリー・フェネットー水泳部兼生徒会役員…よろしくね！」

シャーリーはジルの元に駆け寄ってきて手を握りあいさつをした。

「あつ！オレはリヴァル・カルテモンドー書記ね！」

彼女に見とれていたリヴァルはハツ！としてあこがれをする。

「あつ・・・あの・・・二ーナ・アインシュタインっていいます・・・」

なぜか顔を真っ赤にしてもじもじしながら自己紹介をする二ーナ。

「私は・・・ジル・・・・」

急なことに戸惑いながらも自己紹介をする。
そしてそんな彼女をカバーするようにミレイが付け加える。

「あのね、彼女、記憶喪失なのよ」

「「「えつーっ！」」

ミレイの発言に驚く3人。

「それでね、私ひとりじゃ彼女が困つてゐる時の手助けにも限界があるから、あなた達にもお願ひしたいの」

「やめなよ。あいつは」

「まかせてくださいこいつ余長ーー。」

「うん・・・」

「アーティスト」

快く引き受けてくれた3人に、ジルは頭を下げる。

「そーだつ！彼女、ファーストネームはあるけど、ファミリーネームがないの・・でもそれじゃなにかと不便もあるだろうから、みんなで決めよーつ！ってことでっ！」

そういうてミレイはジルと3人を座らせ、ナナリーの車椅子を机によせると、「今日の議題は、ジルちゃんのファミリーネームでえーっすー！」となにやら勝手に会議を始めた。

「じゃあ、だれかいい案がある人つ！」

「はい。」

ミレイが発言を促すと、まゆはシャーリーが手を挙げた。

「私は『バレンタイン』がいいと思います！」

「つまり・・・ジル・バレンタイ・・・いやいやっ！それはいろんな意味でまずいでしょっ！？某ゲームをまるまるパクつてるし！」

とこうわけで即却下。

そして次に名乗りを上げたのはリヴィアル。

「オレは『ヴィルヌーヴ』が良いと思います！」

「ジル・ヴィルヌー・・・ってそれもいりこねまぢこわよつ！ F 1 のレーサーじゃないつ！！」

これも即刻却下。
そして次に二一ナ。

「えっと・・・私は・・・『（あまりの内容に自主規制をせいで
ただきます）』」

「ダメ！ダメ！ダメ！ぜーつたいだめっ！！」

いろいろとツッコミ疲れて呼吸が荒いミレイ。
そして最後にナナリー。

「そうですね・・・『フランゾワース』なんてのはどうでしょう？」

「いいわねっ！流石ナナリー！－どつかの3人とは大違い！」

ミレイに褒められたナナリーは嬉しそうに頬を赤らめる。

「あなたはどう？これでいい？」

「はい、なんかお花の名前みたいでしてきです」

「よしつーなら決定！あなたの名前は今日から『ジル・フランゾワ
ース』だつ！！」

満足そうにミレイはうなずいた。

そんな光景を見ていたジルは、なんだかおかしななり笑い始めた。すると他のメンバーもそんな彼女につられて笑い出すのであった。

その夜・・・

ジルはナナリーと一緒に夕食を食べていた。

ルルーシュが今夜は遅くなるとシャーリーに伝言していたので、先に食べることにしたのだ。

「へえ、あなたのお兄さんってそんな人なんだ」

「はい、料理なんかもうじく上手なんですよっ」

そして2人が談笑していると、部屋の扉が開いて、黒髪でアメジスト色の瞳の少年、ルルーシュが入ってきた。

「ただいまナナリー」

「おかえりなさいませ、お兄様」

ナナリーは彼を笑顔でむかえた。
そして彼も笑顔を返すが、どこか疲れて、思い詰めているようだつた。

「あつ・・・あの・・・・・」

「大丈夫、会長から話は聞いてるよ・・オレはルルーシュ・ランペルージ、よろしく

「あつ、ジル・フランゾワースです・・・よろしくお願ひします・・」

「ああ・・・じゃあオレは先にシャワーを浴びてくるから、ゆつくりしてくれ・・・」

そういうてルルーシュは部屋の奥へと消えていった。
ジルは何かを彼に感じ、その後ろ姿をしばらく見つめていた。

STAGE 01 【名もなき少女】（後書き）

ホントはもう少し書きたかったですね・・・

でもだらだら引きずつてたらなんかめちゃくちゃになっちゃう
だつたんで・・・w

てか途中からネタでしたね。

バイオハザードはびっくりもいたかったんですよー！

やつしたらもう・・・結果は見事に・・・w

次話はもう一人の少年のお話ですっ！！！

どーぞお楽しみにっ w

STAGE 02 【悪魔の田舎め】（前書き）

* 誤字・脱字の指摘、よろしくおねがいします*

STAGE 02 【悪魔の田舎め】

【特別派遣嚮導技術部・倉庫】

「ふんふふ～んふ～んふ～ん」

一台の大型車両の横で、どこか拍子ぬけた雰囲気のメガネをかけた男 ロイドは、鼻歌を口ずさみながら、上機嫌で目の前のパソコンのキーを淡々と叩き続ける。

彼はブリタニアの宰相であり、第一皇子シユナイゼルお抱えの特別派遣嚮導技術部、通称『特派』の主任研究員である。

そんな彼がなぜこんなにも上機嫌なのかといつと、原因は彼の開発したKMF、ランスロットにあった。

この機体は、世界で唯一の第七世代型KMFであるのだが、あまりにハイスペックを追求したため、今までこれを乗りこなすデバイサーがいなかった。

しかし、先ほどのシンジユクでの事件の際に、素晴らしいデバイサー（パート）を見つけたのだ。

それは、榎木スザクという、イレブン、もとい名譽ブリタニア人だ

が、自身の自信作であるこの機体を乗りこなす人間なら、正直彼は誰でもよかつたのだ。

そしてロイドはそんな中から得られた戦闘データを解析している最中なのだ。

ガラガラ・・・ガツシャーンッ！－！

そんな中、突然倉庫の奥の方で大きな物音がした。

ロイドはその物音に驚き、ぶつぶつと文句を言いながらも、気になつて様子を見に行つた。

するとそこには血だらけのボロボロの軍服だけをまとつた少年が倒れていた。

「あはあー・セシルくんー！－！」

ロイドはまるで何か面白いおもちゃでも見つけたかのようにその少年を見ると、大声で倉庫に止まつていた大型車両の中にいる人間を呼んだ。

そして中から出てきたのは同じ特派の研究員兼ロイドのお守り役である女性 セシルである。

「はーい！なんですか、ロイドさ・・・つてキヤアアー！－！」

呼ばれたセシルがひょっこり顔を出すと、そこには少年が横たわっ

ており、思わず彼女は悲鳴をあげた。

「ちょ…大丈夫なんですかっ！？」

慌ててかけより、脈を計るセシル。
どうやら生きてはいるようだ。

「…ついで医務室へ…ロイドさん…」

「くつ？」

「手伝ってください…」

「ええ…なんで僕が…」

「何かいました？」

「い…いえ、なにも…」

めんどくわうと言つたロイドにセシルが笑顔で脣す。

それを見た彼は、一瞬背後にこの世の思えないものが見えた気がした。

そして渋々ながら、ロイドは少年の両肩を、セシルは両足を持ち上げ、半ば引きずりながら、倉庫に設置された簡易的な医務室へと運ぶ。

「酷い・・・服にこんなにも穴が・・・きっと誰かに撃たれたんですね・・・」

「ええ～、でも傷一つないよ？彼

「えつ？」

ロイドが少年の着ている服をめぐり上げて、内側の身体を見る。それを聞いたセシルも、ロイドの隣から覗き込む。確かに、服にはたくさんの銃弾の跡と、大量の血液が付いているのにも関わらず、彼には一切の傷がない。

撃たれて死んだ誰かの服を着た、という考え方もあるが・・・

「とにかく警察に・・・」

「あはあ～、でも」の子、軍の制服を着てるんだから、こっちで軍のリストから洗った方が早いんじゃない？」

「あ～、確かに・・・じゃあさっそく調べてみますーそれで、この

子は・・・?

「まあ目が覚めるまでここに寝かせておけばいいよ

「わかりました」

そういうてセシルはパソコンを取りに一度、車の中に戻った。
そしてロイドは興味深そうにその少年を見ていた。

2人の男が、木製の小舟に乗つて海を漂つていた。

1人は甲冑を着た銀髪で、アメジスト色の瞳をした男。

彼の目はどこか虚ろで、遠くの何かを見つめているようだった

もう一人は、黒いマントに身を包み、フードを深くかぶつているため顔が見えず、男か女かも不明である。

辺りは濃い霧に包まれ、1m先すら視界がきかない。

しかし小舟は誰かが漕いでいるわけでもないのに、まるで田地を知っているかのようにゆっくりと進んでいた。

そしてしばらくすると大きな揺れが小舟を襲った。

どうやら浅瀬に乗り上げたようだ。

2人が小舟から降りると、脛の辺りまで足が海水に浸かった。
少し歩くと、小さな浜辺に辿り着き、その奥には森が生い茂っていた。

すると突然、銀髪の男の顔が怒りに歪んだ。

声は聞こえないが、彼はもう一人の方を振り返り、何かを怒鳴つて
いる。

もう一人の口元は見えないが、会話をしているらしい。

彼は怒鳴るのをやめたが、まだ顔は怒りに満ちている。

しかし、だんだんと顔から血の気が引いていき、青ざめてゆく。

それでもう一人の男は引き返していき、霧の中へと消えた。

取り残された彼は、踵を返し、森の中へ入っていった。

どのくらい歩いただろ？

目の前に突如、開けた場所が現れ、奥には洞窟があつた。

彼は何か得体のしれないものを感じ、帯刀していた剣 つるぎ を抜いた。

警戒しながら、ゆっくりと洞窟の中に足を進める。

だがそこにはただ一つ、大きな石の扉のようなものがあるだけだった。

その扉の真中には、鳥のような不思議な紋章が彫られている。

彼はその扉に恐る恐る近づき、手を伸ばします。

そしてその手が触れた瞬間、辺りは眩い光に包まれた・・・

「…………痛つ……」

「ひどぶつ！ー！」

そこで彼は目を覚ました。
そして勢いよく起き上がったせいで、彼を覗いていた男と頭が正面衝突した。
どうやら今までのは夢だつたらしく、痛みで現実に引き戻された。
そんな彼と同じように痛みでその場につづくまる・・・それはロイドだった。

「どうしたんですかつー？」

ロイドの奇声を聞いたセシルが慌ててかけつけた。

「・・・な・・なんでもないです・・・」

ロイドが涙目で答える。

「うう・・・・めん・・・・

同じく涙田で頭を押される少年。

「……ここよ・・・・覗いてた僕も悪いし・・・・でも、もうひょ
つと起きたタイミング考えてよ・・・・」

「それよつあなた、大丈夫?」

「あのお~・・・・僕の心配は・・・?」

セシルは痛がるローデを半ば無視して少年に顎け寄る。

「あなた、名前はなんて言ひの~?」

「名前は・・・・・レイ・・・・でもファミリーネームはわからない・・

・

「わからない・・・・?じゃあどうから来たとかは?」

レイは必死に思いだそうとする。

しかし田を覚める前の記憶が一切わからない。
一体自分は誰で、なぜここにいるのか・・・

「君はその服を着てこの倉庫に倒れてたんだよ?」

痛みから復活したロイドが、脇の机に置いてある皿だらけでボロボロの軍服を指差した。

「・・・全然」

「そつ・・・記憶喪失なのかしら・・・あつ、私はセシル・クルーエー・ム・・そしてこいつがロイドさん」

「どおーもおー」

ロイドはくらへらしながらズイツと彼に顔を寄せた。

「あのさあー、君、KMFの騎乗経験は?」

「・・・はい?」

「ロイドさん？」

「いいじゃない、」の子がもしKMFのパイロットならそれがきっかけで思い出すかもよ？』

KMF・・・記憶はないが、なぜか操縦の知識だけは頭に残っていた。

そして悪びれもせずロイドは話を続ける。

「君が気絶してたときこりこり調べさせてもらったんだけど、なかなかいい体つきだし、一回シミュレーターしてみない？』

「ここのこと…？」

もし自分がKMFのパイロットであつたなら、ロイドの言ひつけで記憶を取り戻すきっかけになるかもしれない・・・

「待つてくださいロイドさん…そんな誰かもわからない一般市民に「大丈夫大丈夫！主任は僕だし、ござとなつたら責任もとるから

～」

そしてセシルの反対を強引に押し切り、レイのKMFシミュレーションは決定した。

1時間後 :

『どうレイ君？準備はいい？』

「いいですよ、Ｍｓ・セシル・・・」

彼は黒のパイロットスーツに身を包み、シミュレーターのコックピットに座っていた。

操縦知識はあつたが、念のために教本も読んだ。

するとそこにはＭＶＳやブレイズルミナスなどという見たことない知識もあつたので、見ていて正解だな、と彼は思っていた。おそらく新システムなのだろう。

2人に詳しく話を聞くところによると、特別派遣嚮導技術部は、兵

・ 器の開発を目的としているのだから、当然と言えば当然なのが・・

『今回、レイ君が使用するナイトメア「N-O1 ランスロット」、私たち特別派遣嚮導技術部が開発した、世界で唯一の第七世代型MFよ』

『まあつまつには僕の最高傑作ってこと』

セシルの通信にロイドが割り込む。

彼女は、こきなりこんなハイスペックな機体でシミュレートするなんて・・・と思いつつロイドを見たが、彼の顔にはそんな心配事は一切見えない。

そんなロイドを見た彼女は、諦めて話を続けた。

『では、今回のミッション内容を説明します。戦場は市街地を想定し、敵はザガーランドが4体、これを制限時間10分以内で撃破してください』

「りょーかい」

『レイく~ん、これは「イエス・マイロード」って言つてもらわなきや気分がないでしょ~?』

「（シコミ）ノートに気分は必要なのか……」と思いつつ「今度から氣をつけます」とロイドに返事をして、操縦桿を握った。

『では、これよりシコミノートを開始します』

セシルの会話とともにブザーが鳴り、敵のサザーランドが現れた。

「すつ・・すゞいですね・・・・・」

「おお・・・・」

シコミノート画面を外で見ていたセシルとロイドはその様子に驚いた。

ところのもほんの一瞬で勝負がついたのだ。

目の前に現れた4機のサザーランドの斬射を掻い潜り、大きく跳躍した後、ハーケンを飛ばしながら両腕に持っていたMVSを投げて4機全てを一瞬で沈黙させた。

制限時間は9分46秒も余っている。

「適合率92%・・・」

「でもスザク君には及ばないか～」

セシルはその高い数値に驚き、ロイドは少し残念そうに呟ついた。

『あの……これで終了……』

レイから通信が入る。

声からは物足りないと云った雰囲気が感じ取られる。

「あなたがまだ続けたいなら続けてもいいわよ？」

『じゅあお願いします……それと……もつとレベルを上げてもらえると……』

それを聞いたロイドはなぜか笑いだし、セシルは何とも言えない顔をしていた。

『お願ひします』

「じゃあ一気に上げるわよ?」

ミッショナンバー？

戦場：市街地

敵部隊：ザザーランド28機、機動戦闘車54台

制限時間：50分

ヒシュミレーターの「シクピット」の画面に表示され、開始のブザーが鳴った。

それと同時にどこからともなく十数機のザザーランドが現れ、彼のまわりを囲み、アサルトライフルで撃つ。

しかしそれがランスロットに当たることはなく、右腕のハーケンで宙に飛びあがり、素早くそれを巻き上げると、正面にいた2機のザザーランドに再びハーケンを発射した。

すると見事二つとも命中し、そのまま地面に崩れおちたザザーランドに食い込んだハーケンを巻き上げると、勢いよく地面に降下し、脇にいた別の2機のザザーランドをMVSで真つ二つにする。

しかし、さらにその後ろから残ったザザーランドが銃弾を放ち、援軍として何十台もの機動戦闘車がランスロットに迫る。

それを見たレイはシールドで防ぎながら一度狭い路地に逃げ込み、ザザーランドがそれを追いかける。

ランスロットはランズスピナーを使い、両脇のビルを昇っていくと同時に、MVSで側面を壊していく。

その下にいたザザーランドはアサルトライフルを上に向けるが、落ちてきた瓦礫に潰されてしまった。

追ってきた大半のザザーランドはがれきの下敷きになつたが、まだ数機生き残つており、ランスロットはそれらに向けてハーケンを放

ち、無力化していく。

そしてその狭い路地からでると、待ち伏せしていたようにザザーランドがスタントンファをランスロットに叩きこむ。

だがそれをしゃがんで避けると、脚部をMVSで切り捨て、持つていたアサルトライフルを奪い、それでコックピットを打ち抜いた。

『す、ごいねえー、君』

突然ロイドが通信を開く。

「そうですか？まあ機体のおかげってのもあるんですねけどね

謙遜するレイだが、何故か笑顔である。

しかもロイドと会話しながらも次々とザザーランドや機動戦闘車を破壊していく。

彼は自分がこれほどまで出来るのは思っていなかった。

しかもこの機体は素晴らしい。

まるで自分の手足のように思い通りだ。

「フフフ……」

思わず笑い声が漏れる。

そして結局彼は全ての敵をノーダメージの中20分で無力化し、シヨミレートを終えた。

「いやあ～、君も最高だねえ～」

シユミーレーターから降りた彼にロイドが言った。

「お疲れ様、でも本当にあなたはすごいわ・・・でも軍のデータにあなたの名前はなかったのに・・・」「

セシルは彼に飲み物とタオルを渡しながら不思議そうに言った。
確かに彼女の言うとおりだ。

こんなにもＫＭＦの操縦知識があるといつに、それを扱うブリタニア軍の騎士のリストに自分はないのだ。

「（じゃあなんで僕はこんなに・・・）

レイはどうだけ考へても答へは浮かばなかつた。
そして彼は考へることをやめた。
所詮ただの記憶だ。
ないと言つて別段問題になるわけでもない。
それには自分の生きる道を見つけた気がした。
シユミーレーターとはいえ、あの戦場の高揚感・・・
相手を破壊するたび心地がよかつた。
そして彼は決めた。

「エーテ・ロードー・・頼みがあつます」

「ん? なんだい?」

「僕をいいに置こへばだせー」

「いこよ」

「早つ……」

ロードの器答に思わずセシルがつひこむ。

「いやあ~、だつて彼も優秀なデバイサーだし、今度新しい子が一緒に血作のエミトを持つてくれるから一度いいんじやない?」

「えつー? そりなんですかー?」

「ちつてなかつたけ?」

「あこてませんつー?」

「あら失礼、つてことで君の身分は」つちでなんとかするから・・・
ひつー」めんなさい」めんなさいつー。」

あまりに適当なロイドについでセシルの堪忍袋の緒が切れ、ロイド
が田の前でボコボコにされしていく。
レイはそれを見ながらこの先に大きな不安を抱えるのであった・・・

STAGE 02 【悪魔の田原め】（後書き）

戦闘シーンって難しぃ…つん。

まあ今度はもう一人の男の子の登場です。

こいつの方はなかなかつかみ難いのにキャラを田指したんですね
ど…

それになぜか2話より3話の方が先に下書きができちゃったんですね
w

でわ、最後まで「J愛読ありがと」「これこましたw
(いや、完結じゃないですかねっ!?)

STAGE 03 【レイの興味】（前書き）

* 誤字・脱字の指摘、お願いします*

STAGE 03 【レイの興味】

「榎木スザクが捕まつた …」

その知らせを聞いたロイドは半狂乱だった。

「せつかくの僕のパーティがあつ！！！」と一日中言っているのだ。そのたびにセシルの笑顔の鉄拳制裁を受けるのが、ここ最近の日課となっていた。

レイは別に彼が処刑されようがどうでもよかつたが、ロイドやセシルの話によると、彼の適合率は94%で、自分の92%より適合率が2%ほど良いらしい。

2%とは傍はたから見たらたいしたことはないかもしれないが、70%から80%まで適合率を上げるなら、それこそ努力は必要だが、そこまで難しいことではない。

しかし、90%台に入つたとたん、1%でもそれを上げることは格段に難しくなる。

それは努力に加えて、その者自身の才能が必要になるからだ。

そしてレイは、自分より優秀な彼がどんな人物かといつことには少し興味がある。

そんなことを考えていた彼は、手に持っていたロイドに頼んで作ってもらつた自分の戸籍の情報を、倉庫2階のブリッジの手すりに座つて見ていた。

名前はレイ・チェスター。

自分ではなかなか気に入つてゐることはない、ここだけの秘密だ。

「・・・ロイドちゃん！－！榎木スザクに会いたいんだけど、やっぱ無理？」

レイは何の躊躇もなく2階のブリッジから飛び降り、見事ロイドの前に着地する。

「・・・君よく骨折しないね」

「痛いけどね」

ロイドが落ちてきた彼にそうこうと、レイは笑つて答えた。

「まあいいんだけどさあー・・・面会は君じゃ無理だね、まだ正式に騎士公に任命されたわけでもないし・・・」

「そつかあ・・・残念だなあ・・・」

「あつ、でも今日、彼、護送されるみたいだから見る」とはできる
かもね」

ロイドは思い出したように叫んだ。

「ふうん・・・」

レイは一瞬心中で、仮面を被つて護送車を襲い、樅木スザクを強奪しようかと思ったが、あまりにも馬鹿馬鹿しかったので止めた。しかし本当にそんな馬鹿馬鹿しいことをやってのける人間がいると
は、その時の彼は知る由 よし もなかつた。

そして護送予定時刻 :

『「覗ください・・・沿道を埋め尽くした人ばかりを』

TV中継で護送の様子を実況するアナウンサー。

沿道は民間人の見物エリアとして開放されていた。

その道は下にモノレールが通つており、橋のような構造になつていた。

レイは後の方で来たため、後ろの方でぴょこぴょこしていた。

「・・・もつと早く来るべきだつたなあ・・・全く見えないじゃん」

辺りをキョロキョロと見渡すと、道の両脇に橋を支えるアーチを見つけた。

しかたなくレイはあるで忍者のように軽々とアーチの天辺に登り、その上から見学することにした。

そして丁度その時、政庁の方から、周りをサザーランドで囲まれた護送車が現れた。

「へえ・・・あれが枢木スザクかあ・・・」

護送車の上で、拘束具を着て、首に何やら装置を付けた少年が、2人の兵に銃をつきつけられて立っていた。
すると突然護送車とサザーランドが停止した。

「ん・・・?つてぐふおつ!...」

なぜこんなところで止まつたのか不思議に思ったレイは、思わず身を乗り出して落ちそなうになる。

それはさておき、護送車が進む方向から一台の白い車が走ってきた。ビリやらあればクロヴィスの御料車を模した車のようだ。

「（相手ふざけてるなあ・・・でもこれで面白くなつそうだ）

レイはそう思いながら一やりとした。

そして護送車の前で停止したそのブリタニア国旗の垂れ幕が燃え、そこには黒い仮面を被つた人物が立っていた。

「私は・・・ゼロ」

仮面の人物は自らをそう名のつた。

そしてクロヴィスの葬儀の際にＴＶで何やら演説していた男・・・ジエレミアだつただろうか？

彼が空に1発、発砲するとナイトメア／ＴＯ－Ｔ４で空で待機していた数機のザーランドが偽御料車を囲む。

だがゼロはそれに動じることはなく、手を高く掲げ、指を鳴らした。すると後ろの車装が真つ二つに割れ、その中から大きなカプセルが現れた。

それを見たジエレミアの表情は、驚き、恐れ、狼狽している。

なにやら相当危険な物らしい。

しかしジエレミアは勇敢にも射殺命令を出さうとするが、それを遮るようにゼロが口を開く。

「いいのか？公表するぞ・・・オレンジを」

その言葉に周囲の人々がざわつく。

「オレンジ・・・なんかの暗号?」

レイもゼロが何を言っているのかさっぱりわからず、「（リフレイ
ンでもやつてんのかなあ？）」と心中で思っていた。
ゼロはそんな周りの声などまるで気にせず、運転手に合図を送り、
車をゆっくりと前進させる。

「私が死ねば、公開される」となつていて・・・

「なつ・・・なこをつ・・・!？」

「オレンジ」とこの単語に全く心当たりのないジョレニアはただた
だつぶたえている。

すると突然ゼロの仮面の左耳の辺りがスライドして開いた。

「そうされたくなれば『全力』で私たちを見逃せつ！...そつちの
男もだつ！..」

そしてその奥の瞳に宿つた絶対遵守の力がジョレミアを支配した。こうして後々の世まで語り継がれるオレンジの転落人生が幕を開けた。

「ふんっ！ いいだろう！ その男をくれてやれっ！」

「なつー・ジョレミア卿！！ 今なんどつー？」

「その男をくれてやれっ！ 誰も手を出すなつー！」

「どうこういとだジョレミア… そんなことには計画に「キューエル卿… これは命令だつー！」

ジョレミアの決定に他の純血派メンバーから抗議の声が上がる。しかしジョレミアはそれらに有無も言わさない。

こうして榎木スザクは解放された。

そしてゼロは手に持っていたスイッチを押した。

するとカプセルから紫色の煙が噴出し、それを見ていた群衆はパニックになり、我先に逃げ出す。

その混乱に乗じてゼロとスザクと運転手は沿道から飛び降り、下で控えていたMR-1がハーケンを射出。

それについた布をクッショーンとして着地し、そのまま下のモノレールに乗り込んだ。

その間も純血派のメンバーはそれを必死に阻止しようとするが、それをおさらいにジン・ミニアに阻止された。

「いいねえ・・・じゃあ僕もっ・・・」

その様子を見ていいたレイは、そのモノレール目がけて飛び降りる。20mほど落下した彼は、見事モノレールの上に大きな音を立てて着地した。

どうやら中の彼らは気付かなかつたようだ。

そしてモノレールは発進し、猛スピードで逃げるのであった。

【とあるゲットー】

ゼロとスザクと運転手に扮していたカレン達が逃げ込んだのは、ゲットー内のある廃劇場だった。

「まさか本当に助け出すなんて・・・」

「なんなんだ、あいつは?」

「馬鹿馬鹿しい! あんなハツタリが何度も通用するかつてーのつー」

その廃劇場の外で、扇グループのメンバーが口々に謎の仮面の男、ゼロについて話していた。

そしてそのグループのリーダーである扇要が口を開いた。

「しかし認めざる得ない・・彼以外の誰にこんなことができる? 日本解放戦線だつて無理だ・・・少なくとも僕には出来ない・・・みんなが無理だと思つてい

たブリタニアとの戦争だつて・・・やるかもしれない・・・・彼なら

それを聞いたカレンは思わず劇場の奥を振り返った。

彼は言った・・やるなら戦争だ! と・・・

もし本当にそれを彼が成し遂げようとしているのだあれば、お兄ちゃんも・・・

そんなことを考えていたカレン達の会話の様子を柱の影で見ていたレイは、そのままこつそりと劇場の奥へと入つて入った。

「相当手荒な扱いを受けたようだな・・・」

その奥はゼロとスザクしかおらず、2人は話をしていた。

「やつらのやり口はわかっている、榎木一等兵・・・ブリタニアは腐っている」

なぜか彼が発した「ブリタニア」という単語には、とてもない絶望が感じられた。

スザクはそんな雰囲気を前にも感じた覚えがあった・・・まるでルーシュみたいだ。

「君が世界を変えたいなら、私の仲間になれ」

「君は・・・本当に君がクロヴィス殿下を殺したのか?」

「これは戦争だ、敵将を討ち取るのに、理由がいるか?」

「毒ガスは?民間人を人質に取つて!」

「交渉事に、ブーラフは付き物……結果的には、誰も死んでいない」

「結果……？そつか……そういう考え方で……ふつ……」

なんとなく彼の考えがスザクにはわかった。
ますます彼はルルーシュみたいだな……だけどそんなことは流石
にありえない。

そう思った彼は自嘲気味に笑った。

「私のところにに来い……ブリタニアは、お前が仕える価値のない国だ」

ゼロがスザクに手を差し伸べる。
スザクは別に彼が嫌いではなかった。
しかし7年前に自分がしてしまった「罪」……
きっと彼のやり方は間違っているのだ。
僕にはよくわかる。
だから……

「そうかもしない……でも、だから僕は価値のある国に変える
んだ！ブリタニアの中から！」

「（へえ～、あの子そんな風に思つてたんだあ～）

レイはゼロとスザクの会話を影から見ていた。
「ブリタニアを中から正しい方法で変える」

それが彼の理想なのだろう。

彼は別にそれを否定はしない。

理想とは欲望だ。

良くも悪くも人間を動かすための動力源なのだ。

「（まあ彼も面白いけど、今は・・・）

そう思いながらレイはゼロへと田を開けた。

「ばつ・・・・馬鹿かお前はつーー。」

彼に背を向けてこの場を去り去とするスザク。
ゼロ・・・いや、その仮面の下のルルーシュは、思わず怒鳴つてしまふ。

ました。

どうしてこんなにも彼はかたくなに自分を拒むのか。

昔はもつと自分主義のやつだったのに、今は他のイレブンや名誉ブリタニア人のために死ぬなどと言っているのだ。

「昔、友達にもよく言われたよ……」の馬鹿つて……

スザクは懐かしそうに手を細める。

その言葉にルルーシュは思わず口を噤つぐんでしまつ。昔から馬鹿などいひは相変わらず変わつておひず、彼の頭を咎める。

そしてスザクはもう一度その場で振り返つた。

「君を捕まえたいが、ここでは返り討ちだらうからね殺されるなり、僕はみんなのために死にたい……でも……」

スザクは再び歩き出す。

「あらがといつ……助けてくれて……

「（…………）のつ……馬鹿がつ……（…）」

ゼロはその様子をただただ唇を噛みしめながら見送る」としかでき

なかつた。

「あ～らりり、ふられちゃつたね？」

「なつ！…だれだつ！？」

そんなゼロの背後から突如声がした。

彼は驚いて慌てて振り返ったが、辺りが暗いせいで相手の顔は全く見えない。

だが声からしておそらく男だろ？

「・・・いつからそここいた？」

「んつ？最初から」

なんなんだこのイレギュラーは…

ゼロは頭の中で混乱していたが、それを表に出すことはせず、あくまで冷静を装っていた。

相手はそんなことを知つてか知らずか、なにやら楽しげな表情を浮かべていた。

「あのテロリスト達の仲間ではなさそうだな…私を捕まえに来たのか？」

「捕まえる？まさかまさか！そんなつまらない」としないよ？」

男が白々しく答えた。

「……………。」
「うか……だが、お前を生かしておく理由はない……死ね！」

ゼロは仮面のギミックを発動させると、絶対遵守のギアスを男に冷酷無慈悲な命令を下す。
すると男は急につつむぐ。
そして・・・

「……………。」
「ふつ……………。」
「はつはつはつはつ……………。」

男は死ぬどころか、その場で腹を抱えて笑いだした。

「（なつ・・・・・…きかない・・・だとつ・・・・…？）」

ゼロはその得体の知れない男に焦っていた。

この力は例え暗くて顔が見えなくても、遮るものさえなければ効果

はあるはずなのだ。

「ふつ！ そんな『死ねッ！』なんて自信満々に言われても普通死はないよ？ 本当に君つて面白いね？」

どうやら男は笑いすぎて涙が出たりしへ、手で顔をぬぐいながら口に呟つた。

「へり・・・・・！ それでお前は何の用だー？」

「えっ？ いやあ、本当は板木スザクに用があつたんだけど、この様子じゃきっと無罪放免で釈放だろうから今話す必要はないかな？ ってね・・・ それに

君も面白うだし興味があるのさ」

「・・・・・こいつたいお前は・・・・・」

「さあな？ 自分で考へな じゃあゼロ、まだどこかで・・・」

やつらつて男は踵を返して、暗闇の中へ消えて行つた。

「（なんなんだあの男は・・・それにこの力・・・万能じゃないのか・・・？）」

ゼロは先ほどのイレギュラーについていろいろと考へていたが、あまりにも不明瞭なことが多いので、これ以上考へるのは無駄だと判断した。

それに可能性は低いがあの男が今頃ブリタニア軍にこここの場所を教えているかもしれないで、早々にこの場を後にすることにした。

【特別派遣嚮導技術部・倉庫】

ゼロとの初対面（互いに顔は見ていないが）を終え、彼は「（面白いものを見つけたな）」と思いながら上機嫌で特派に戻ると、なにやらロイドも機嫌がよく、はしゃいでいた。

「あー、お帰りレイ君」

最初に彼に気づいたセシルが笑いかけながら言った。

「あー、おーかーえーりいー！」

ロイドもセシルのおかげで気づいたようで、大手を振つていつもの調子で彼を迎えた。

「ただいま

レイモー！」しながら2人と挨拶を交わす。

「どうしたんだいロイドちゃん？ やけに機嫌がいいね？」

だいたいの見当はついていたが、一応レイはロイドにきいてみた。

「コース見てないのかい？ 誘拐されていた僕のパートが戻ってきて、無罪放免になりそうなんだあー！」

そういつてロイドは倉庫内をスキップし始めた。
それをレイは「あはは～・・・」といった感じで見ていてるのであつた。

「ところであなたは今まで何をしていたの？」

セシルはふとレイにきく。

「うへん・・・ゼロとちよつとしたスキンシップ？」

「へえ～、そりゃ・・・ってええーつーーー！」

思わずノコッソ「ロミ」を披露する彼女。

「君、ゼロに会ったのかい？」

ロイドも興味深そつきく。

「うん、見た目通り、相当ふざけた人だつたよ・・・でも頭の回転
は速いね」

「捕まえよつとは思わなかつたの？」

セシルが少し不満そうにきいた。

「捕まえる？ 無茶言わないでよ、僕はまだ正式な軍の人間じゃないし、あそこにはゼロの仲間も大勢いたし、連絡しようにも携帯ももつてないからさ」

「そつ・・・そつね・・・・・

セシルは納得したが、彼の本心は、面白そうだったからゼロを捕まえなかつただけで、あの場のテロリストを無力化するなんてことは彼にとつては容易いことだつただろう。

「まあそんなのどーでもいいんだけどさあ、いい加減彼女を紹介したら？」

「そうですね

「彼女？」

「（）の前言つてたでしょ？ 新人の研究員のこと

何故かセシルは嬉しそうに言った。

そして彼はこの前、彼らと出会ったときにロイドが言っていたことを思い出した。

「フラー君！」

「はい」

ロイドが呼ぶと、奥から一人の女性が現れた。

背は低く、赤茶色のボブガットで微塵のやる気の感じられないオレンジ色の瞳の女性は、上は薄い紫のハイネックに白衣を羽織り、下は白のミニスカートに黒いブーツといった格好であった。

「彼女は、この特派に新任で入った研究員で、フラー・ブレインハイム君」

「今日からあなたの飼育係をする羽目、兼、人間性に関しては全く無能な上司の部下になってしまったフラーです、よろしく」

「・・・飼育」

「無能って……」

おもわずレイとロイドが顔をしかめるが、彼女はそれを気にする様子もなく、レイに握手を求める。

一応彼はその握手に応えるのだが、その後、フリーが二つ手を白衣の後ろで何度も拭っていたことに気づいたのであった。

STAGE 03 【ノイの興味】（後書き）

これからも応援よろしくお願いします。

ヒューリーとだぶん全て修正させていただきました。

「KMF（騎士たる馬）」ですもんねw

ヒューリーとだぶん、感想ありがといひましたw

嬉しくて「ぐへへ～」つて感じですw

そーいえばなんとこんな駄作の小説に感想を書いてくださった読者様がいらっしゃったんですよっ！！w

一回キャラ紹介とかつてした方がいいんですかね？

今のところはアオの辻しまで原作っぽくなっちゃってますね（汗）

そして今回はオリキャラ登場です！w

なんか原作沿いすぎませんないです..。o-r-n

なるべく原作のシーンを飛ばさないで下さい。

そして次回をお楽しみに！

W

STAGE 04 【過去と未来】（前書き）

* 誤字・脱字の指摘お願いします*

【トウキョウ租界・ショッピングモール】

ジルは一人歩いていた。

というのも、なにやらクロヴィス殿下が亡くなつたとかで、午後の授業が中止となり、その暇を生かしてミレイが彼女に「部屋は決まつたけど、まだ服とか小物とか日用品がないでしょ？これで好きな物を買つてくれればいいわ」とたくさんのお金をくれたのだ。

本当はだれかについてきてもらおうと思ったのだが、シャーリーは水泳部で、二ーナはなにやら研究中。

ミレイは生徒会の仕事があり、ルルーシュは出かけている。この前知り合つたカレンは病氣で休んでるし、リヴァルは・・・なんとなく除外。

と言つた具合で都合が合わなかつたのだ。

まあなんとかなるだろ？と思ひ、一日中租界内をぶらぶら歩きながら必要最低限の服と、その他諸々 もろもろ の美知用品を買い終わる頃には、午後の5時をまわつていた。

そしていろいろまわつて疲れたジルは、公園のベンチで一休みしていた。

ちなみに今の彼女の服装は、ミレイが用意してくれたアシュフォー

ドの制服である。

長い銀の髪を後ろで一つにし、ラメの入った金色のシュシュでそれをまとめている。

そんな彼女の座っているベンチの両側には必要最低限の日用品といえ、大量の荷物が置かれている。

しばらくそのベンチでぼーっとしていると、ある意味、お約束である数人の不良たちが近づいてきた。

「ねえねえ君、今から俺たちと遊びにいかねえ？」

その中で、いかにも「ボス」といった感じの筋肉隆々でスキンヘッドの男が一矢二矢しながら話しかけてきた。

めんどくさいので無視していると「おい！きいてんのか！！」と男が怒る。

ジルはため息を一つ吐くと、その男ににこやかな笑顔をむけて言い放つた。

「死にたいんですか？」

「…………はい？」

男たちの声が揃ってきき返した。

彼女は有無を言わせぬ雰囲気を出しながら立ち上がり、笑顔を彼らに向け続ける。

「なつ・・・！ふざけんなよ！？いいから」・・・ぐわっ！？」

男はジルの腕を掴んで引っ張つていこうとしたが、その手はすぐに
払われ、顔面に回し蹴りを食らつた。

それを受けた彼は軽く5mは吹っ飛び、ノックアウトした。

「……………しつ、失礼しましたっ！……………」

残った男たちはしばらく睡然としたのち、ノックアウトした男を抱

ジルは再びため息を吐くと、ベンチに腰掛けた。

三
二
九

時の話だ

彼女は手が滑り、誤っておぐりと人差し指を深く切ってしまった。

ルルーシュやミレイなどにそんなことを言えず、それが普通ではな

それにこの年頃の少女としては異常な身体能力・・・

「はあ～」

本日3度目のため息を吐いた彼女は学園に帰ろうと立ち上がり、ふ

と思つた。

「……………どうだつけ？」

人気のない路地を、拘束服を着た女性が、若葉色の髪を靡なびかせながら歩いていた。

見た目は見目麗しい少女だが、どこか妖艶で、老成した雰囲気が漂つていてる。

そして彼女がその路地を抜け、目の前の公園をつっさつて目的地に向かっていると、顔を伏せてベンチに座っている銀髪の女子学生が目に入った。

見たことのある顔に、思わず彼女は立ちどまつた。

「まさか……あれは……」

彼女はそう呟くと、つかつかと歩み寄り「おい、お前!」といきなり声をかける。

「・・・あなたは？」

女子学生は顔を上げ、何やら黙じて居たが、見つめながら首を傾げる。

「私はC・Cだ」

「C・C? イーシャルだけ?」

「さあな・・・お前の名前は?」

「・・・ジルだけど・・・あなたは私が誰か知ってるの?」

ジルの目が一瞬で何かを期待したような目に変わった。

「まあ・・・ある意味仲間だ」

「仲間・・・? 友達ですか?」

「いや、それは違うが・・・まさかお前記憶がないのか?」

「ええ・・・だからあなたが私について何か知っているのなら、どうか教えてくれませんか！？」

ジルはC・Cの手を握り懇願する。

その顔は必死だ。

その様子にC・Cの心の中には知つてゐるが故の苦笑が広がつていた。

「・・・本当にいいのか？それがどんな結果だひとつ・・・」

C・Cはジルを見つめているが、その瞳からは感情は読みとれない。それを見たジルは一瞬ひるんだが、「かまいません」と力強く応えた。

「・・・わつか・・・だがまずは奴のところにかなくてはな」

「奴？」

ジルは手を細めてC・Cにさぐ。

「ああ・・・といひで、お前はなんで『んなといひ立いたんだ？』

ふと疑問に思つた。・じまジルに向き返す。

「えつー・あつ、えつと・・それは・・・・・

「・・・・・まさか帰れなくなつたのか?」

「・・・・・・・・・

ジルは無言でうつむいている。

どつやうらの図星のようだ。

じ・じは呆れたようにため息を吐いた。

「私もどつやうらで用があるから一緒に行へん

そつ言つて彼女はスタスターと歩き始めた。

「えつー・ちよつ・待つてよつー。」

ジルは両側にあつた大量の荷物をひつつかむと急いで彼女の後を追
いかけた。

その夜 :

ルルーシュは仮面を被り、ゼロとなり、護送されていた無実の親友、枢木スザクを救出した。

そして彼を仲間に勧誘したが、上手くいかず失敗し、少し落ち込み、うつむきながらクラブハウスへと帰宅した。

「ただいま・・・

「おかえり、ルルーシュ」

「なつーーー！」

「おかえりなさい、お兄様」

「その様子だと、食事は外で済ませてきたな」

帰宅したルルーシュは目の前の光景に一瞬で疲れが吹き飛び、驚きのあまり思考が停止した。

というのも、シンジユクで自分を庇つて額を撃ち抜かれ、確かに死んだはずの女がナナリーと一緒に折り紙をしているのだ。ルルーシュはその場にいたジルに「なんなんだこれはっ！？」といつたような目を向けたが、彼女は首をすくめるだけだった。

「…………ジル……頼むから俺にわかりやすくこの状況を教えてくれ……」

「彼女はC・C、今日、私が迷子になつたところを助けてくれた人・それにあなたに用事があるみたい」

「ふふつ、変わったお友達ですね？イニシャルだけだなんて」

ナナリーは楽しそうに笑い、ジルは何故か気難しそうな顔をし、C・Cは黙々と折り紙を折り続ける……
これは何かの嫌がらせなのか？と思わずにはいられないルルーシュ。このカオスな状況に頭が全く機能しない。

「ひょっとして、お兄様の恋人？」

「えつ・・・？」

そんな中ナナリーがルルーシュのある意味。ピンチな状況を知つてか
知らずか、無邪気に彼にきいた。
しかもC・Cが火に油を注ぐように、とんでもないことを口にした。

「将来を約束した関係だ・・・なつ？」

「はつ？」

C・Cの言つているいみがよくわからないルルーシュ。
そして何故かジルがニヤリとする。

「将来つて・・結婚？」

「ちつ！違うつ！違うつて・・そういうのじゃなくて・・・だから、
その・・彼女は冗談が「嫌いだ」

「おめでとうルルーシュ、式には呼んで頂戴ね？」

「なつ！？」

ナナリーの誤解を解こうと必死になるルルーシュをじ・じはあつさ
りと蹴落とす。

さらにはジルまでが彼の敵となってしまった。

「そうですか…お兄様が…意外と早いんですね…」

「もうよナナリー、ビリヤー『お兄様』は彼女とベットの上で朝ま
で更なる愛を育みたいと仰 おっしゃ っていますから、健全な私
たちはお一人の邪魔にならないようにお暇 いとま しましようね
？」

「…・・・・・はい」

とてつもなく悲しそうなナナリーの車椅子を押して一ヤーヤしながら部屋から出て行こうとするジル。

「なつ！？待て！…間違つている！…いろいろ間違つているやつ
！…ジルつ！…」

ルルーシュは「[冗談じゃない!]」といった顔でジルを必死に止める。すると真顔に戻った彼女は彼の耳元でささやく。

「わかつてゐるわ……彼女はあなたに会いたがつていて私の友達とも
も言つておく……それに彼女、どうやら私のこと知つてゐらしい
の……だからナナリーを寝かせたら私も行くから、あなたはこ
じと自分の部屋に……」

そう言い終えると、彼女はナナリーとリビングを出て行った。

「へり……とにかく来いつ……！」

2人が出て行つた後、ルルーシュはこ・この腕をひとつかみ、自分
の部屋へとひっぱつていった。

そして彼はこ・こを半ば投げ捨てるようにベッドに座らせた。

「だれだお前は？」

「言つてただろ? こ・こと」

「そりじゃなくて、お前は「死んだはず、か?」」

ルルーシュが一番気になる点はそこだった。
あの日、確かに彼女は自分を庇つて死んだ。
しかも額を打ち抜かれたのだ。

普通なら生きているはずなどない。

だがC・Jはそんな彼などつゆ知らず、話を続けた。

「気に入つたか？私の『えた力は』

「やはり・・・お前が・・・」

「不満か？」

「いや、感謝してるよ・・・俺のスケジュールを大幅に前倒していく
れたんだから・・・」

「スケジュール？」

「ブリタニアをぶつ壊す予定表さ・・・動きだせるのはもう少し先
になると思つていた」

「壊せると思つのか？その力だけで」

「これがなくとも・・・やるつもりだった」

「見込み通り、面白い男のようだ」

「お前、これからどうする？軍に追われているんだろ？」

「軍と言つても」ハーベー一部、なら普通に隠れているだけで問題はない。
・・・ハーベー我慢してやる

そういう感じ。今は着ていた拘束服を次々と脱ぎ捨て、ベットに潜りこみ、
そのままそのままつもりかづつてしまつた。

「なつーーー！」ハーベー泊まるつもりかづつ！？

「男は床で寝る」

「そういう感じじゃなく・・・」

「私が捕まつたら、お前も困るだろ？じゃあお休みルルーシュ」

「待てっ！まだ話は終わって」ハーベー「そうですよ」

突然ルルーシュの言葉を遮つてジルが部屋に入ってきた。

彼女の右手にはナイフが握られていた。

「ジル！？」

まさかナイフを持つてくるとは思わなかつたルルーシュは焦つた。
だがC・Cは全く動じた様子はない。

「私にそんなもの」「わかっています」

ジルはC・Cの言葉も遮つた。

「でも痛みは感じるでしょ？」いつ見えて拷問の知識は豊富なんですよ？」

「なつー？ジル、そんな知識ビビドリ・・・？」

「それを今から彼女にきくんです

ジルは冷たい皿でC・Cを見下ろす。

それをみたC・Cは仕方ない、といった表情で、1つため息を吐くと、改めてベットに座りなおした。

ルルーシュはその様子を腕組みをしながら壁にもたれて冷や汗をか

いて見ていた。

「・・・私は一体何ですか？」

ジルがきく。

「私も詳しくはわからないが・・・一度、クロヴィスの研究所で捕まっていた時にお前を見たことがある」

「研究所だと？」

C・Cの思いがけない答えに、ルルーシュが眉を寄せて言った。

「ああ・・・おそらくなんかの実験体だつたんだろう・・・お前も心当たりがあるだろ?」

C・Cはジルを見ながらきく。

確かに心当たりはいくつもあった。

常人よりも傷の再生スピードが速く、身体能力も女の身体だというのに体力、筋力、瞬発力もはるかに凌しのぐものがある。

それに記憶はないというのに暗殺術やKMFの操縦方法、拷問術、戦闘指揮に関する知識など、まるで戦うために作られたマシーンともいえるほどのものを有しているのだ。

「そん・・な・・・・・私・・・」

C・Cから自分の正体を聞いたジル。

彼女はあまりのショックのあまりナイフを落とし、その場にへなへなと座り込んでしまった。

そしてそのままからは涙が溢れていた。

「ジル・・・」

ルルーシュはそんな痛々しい彼女をただ見ていることしかできなかつた。

C・Cも無表情ではあるが、顔を背けている。

「私は・・・・どうして・・・・うう・・・・・」

自分という存在がわからない。

何のために生きているのだろうか？

記憶もなく親すら覚えておらず、今まで自分が生きていた幸せすら感じられない。

ただ他者を殺すために生み出された自分。

はたして生きている意味などあるのだろうか？

この世界で独りぼっちの気がした。

いや、きっと独りぼっちなのだろう。

目の前が真っ暗で、何も見えない・・・

絶望だけが彼女を支配し、押しつぶす。

そのとき、先ほどまで持っていた自分のナイフが目に入る。すると彼女はそのナイフをひいつかみ、自分の胸に向けて大きく振りかぶった。

「ジルッ！…やめろッ！…」

それを見ていたルルーシュは慌てて彼女の腕をつかみ、無理やり持っていたナイフを奪い取った。

「なんで止めるのよッ！…放つておいてッ！…どうせ私はっ…！」

私はっ・・・・・！

「君は独りじゃない！…」

「…？」

ルルーシュはジルの両肩をつかみ、まっすぐ彼女を見据える。ジルも思わず涙でぐしゃぐしゃになつた顔を上げて、彼を見る。

「君は独りじゃない！俺も！ナナリーも！会長も！シャーリーも！リヴァルも！ニナも！カレンも君の味方だつ！」

ルルーシュの目は真剣だった。

そこで彼女は悟った。

彼も自分と同じだったのだろうと・・・

「・・・・・私は・・・自分の正体がなんであれ、覚悟はしていたつもりだつた・・・だけど実際に向き合つてみると、そう簡単に『はい、そうですか』なんていかないのね・・・・・」

「それは人間として当たり前だ・・・むしろそう感じない人間の方がおかしい・・誰も君を責めたりなんてしないさ・・・・・悪いのは君じゃない！ブリタニアだつ！！」

「ブリタニア」という単語を口にしたルルーシュは、どこか憎々しげだった。

「・・・俺も昔は君と似たようなものだつた・・・全てに絶望していた・・・・・」

ルルーシュはジルから離れ、背を向けて自分の生い立ちについて語りだした。

「俺は元ブリタニアの皇子なんだ・・・」

「皇子・・・つて・・・」

「ああ・・・7年前、俺の母親はテロリストの仕業に見せかけて殺されたんだつ・・・！」

彼は拳を強く握り締めていた。

「母の身分は騎士公だつたが、出は庶民だつた・・・他の皇女たちはさぞ目障りだつたんだろう・・・そして母は殺され、ナナリーは足と視力を失つたつ・・・！それなのに、あの男・・・ブリタニア皇帝は母の葬儀やナナリーの元にも顔を出さず、あまつさえ、当時、敵対していた日本に俺たちを人質として送つたつ・・・！」

ルルーシュの目は怒りと憎しみに燃えている。
そしてジルはそんな彼の話を無言で聞いていた。

「だがそんな日本でも俺たち兄妹にとつていいこともあつた・・・今まで召使いや義兄弟に囮まれて育つた俺に、初めて友達ができた・・・俺とナナリーはそいつと3人でささやかだが幸せな時間を過ごしていた・・・だがブリタニアはつ・・・！」

「日本に侵略戦争を仕掛けた・・・」

怒りに顔を歪めたルルーシュの言葉を、今まで傍観していたCCC
が引き継いだ。

「・・・そうだ・・・だから俺はその時悟ったんだ！ブリタニアがあ
つては、俺もナナリーも幸せにはなれないと・・・！だから俺は
決意した！ブリタニアをぶつ壊すとつ！！！」

彼は目の前にあつたチェス盤の上にあつた駒を怒りにまかせて手で
薙ぎ払つた。

そしてしばらく沈黙が続き、冷静になつたルルーシュが口を開いた。

「・・・ジル・・・俺と一緒に来ないか？」

「えつ？」

ジルは突然の彼の言葉に驚いた。

「俺と一緒にブリタニアをぶつ壊さないか？」

ルルーシュはゆっくり、そしてはつきりとした口調で彼女にきいた。

「俺たち兄妹も、君も、このブリタニアという国に人生を狂わされた被害者だ・・・君には権利がある・・戦う理由も今できただろ?」

「・・・あなたにそれができるの?」

「できるつー!いや!成さなくてはいけないんだつー!せめてナリーダけでも幸せに暮らせる世の中を創るためにはつー!」

彼の目は真剣だった。

普通に考えたら無謀な話だろう。

相手は世界の3分の1を占める超大国。

それをたかが現状、2人の人間が覆そだなんて・・・

ジルにはどこからそんな根拠が湧いてくるのかわからなかつたが、
彼なら成し遂げる気がした

「それに、俺は力を手に入れた・・・」

「力?」

ルルーシュはニヤリと悪魔のよつな笑みを浮かべ、それを見た彼女は背筋がゾクツとするのを感じた。

「ああ・・・そこそこのおかげだな・・・・・」

ジルがC・Cを見ると、彼女はつまらなさそうに自分の髪の毛をいじっていた。

「今その力を君に教えることはできないが、もし俺についてくれるなら、必ず君の望んだ未来を見せよう!—!—」

「未来・・・」

ジルはその言葉に心惹かれた。

自分が今一番欲しているもの
そして望んではいけないもの
だけど彼は宣言したんだ。

“未来を見せよう”と・・・
なら、自分が成することは一つ。
そして彼女は決意した。

「・・・いいわ・・ルルーシュ、私はあなたの騎士となりましょ・・・
・・・あなたやナナリー・・自分の未来のために・・・

「ありがとう・・ジル・・・」

感謝の言葉を述べたルルーシュは彼女に優しく笑いかけた。

「つーー／＼＼＼＼＼

するとなぜかジルの顔が真っ赤になり、彼に背を向けてその顔を隠した。

「じゃーじゃあ私はもう寝るわね！？泣いたら疲れちゃって・・・」

そう言つてジルはそそくせとその部屋から出て行ってしまった。

「・・・良かつたのか？あんなにベラベラ話して・・・」

彼女が出て行き、2人つきりになつた部屋でじ・じがルルーシュにきいた。

「・・・彼女があまりに不憫でな・・・まさかブリタニアの実験体 モルモット だつたとはな・・・」

彼は苦々しい顔で答える。

腹違いとはいって、自分の兄弟がやつたことなのだ。

ルルーシュも彼なりに責任を感じていた。

だがそれもクロヴィスを殺した自分への言い訳の一つでしかないな」とルルーシュは半ば自嘲的に笑った。

「……そうか……まあ私も気になることはあるしな……」

「……そう言えば……最後に一つきいていいか?」

「なんだ?」

C・Cは眉をひそめて彼に向き返す。

「この力……通用しない相手もいるのか?」

「……お前の場合は一度使った人間……そして私だな……だがどうしてだ?」

「今日ゲットーで、この力を使ったが効かない人間がいた……」

「なら一度使った人間じゃないのか?」

「そりゃないんだが・・・そもそもまだこの力を手に入れて日は浅い・・実験のために何度か使ったことはあるが、彼らはゲットーで会う可能性はあまりに低い人間ばかりだ」

「・・・それは私にもわからないな・・・じゃあ私は寝るぞ、疲れ
た」

そう言って彼女は再びベッドに潜りこむと、そのまま眠りについた。ルルーシュは今日起こった出来事をいろいろと考え、頭の中で整理をつけていたが、あまりにも情報が少なすぎる所以で考えをまとめられずにいた。

そして彼はそのうちに深い眠りに落ちていた。

STAGE 04 【過去と未来】（後書き）

はい、今回はジルのちょっとした過去のお話ですね。w
そして今までよりちょっとぴり長いですね。

そして自分の文才のなさに改めて乙です。o_rz

でもこんな駄文でも読んでくださる方がいるのならっ!!
と思いつつ書いておりました。

もし何か譜に落ちない点などがありましたら、ご質問いただければ
答えられる範囲で答えさせていただきます。

まあなんせご都合主義ですからそういう点は多々あるでしょう。w
そしていい加減キャラ紹介を書かなくちゃなあ、と思いつつ、なか
なかキララがまだあまり定まっていませんね…（汗）
できれば次回にはできるのよろしく頑張ります。w
ではまたノシ

STAGE XX 【キャラクタープロフィール】（前書き）

一応まだオリキャラは出すつもりなんで、その都度更新していくします！

まだ明かせない設定とかも、後々掲載する予定です。w

STAGE XX 【キャラクタープロフィール】

ジル・フランゾワース（ ）（推定17歳）

銀髪のまっすぐなロングヘアードアメジスト色の瞳をした色白の美少女。

カプセル強奪事件の際に、クロヴィスの秘密研究所から逃げ出す。ほぼ不死であり、驚異的な治癒能力と、身体能力を有する。

気分で髪の毛を1つに結ぶこともある。

金色のラメの入ったシュシュがお気に入りで、右腕に常時はめており、愛用している。

自信の記憶を探しながら、ルルーシュを信じて自らの未来のために彼の騎士となることを決意する。

脱ぎ戸で、よくルルーシュに注意されている。

武器はサーベルと自作したマグナムを愛用。

体術と剣術が得意。

科学者としてもそこそこスペックを持つており、KMFの改造なども行っている。

好物はドーナツ。

レイ・チエスター（ ）（推定17歳）

銀髪でボサボサ頭のアメジスト色の瞳をした美少年。

カプセル強奪事件の際に、クロヴィスの秘密研究所から逃げ出す。

ほぼ不死であり、驚異的な治癒能力と、身体能力を有する。

モットーは「己の欲には忠実に」であり、とてもない野心家。

自身の記憶に関しては全く興味がない。

お調子者であるが、目的のために手段は選ばない結果主義者。ブリタニアへの忠義は皆無。

大の戦闘マニアでもあり、狙撃や早打ちなど銃の扱いは超一流。右の足首にコンバットナイフを仕込んでいる。

好きなものはナイトメア。

苦手なものはフラー。

フラー・ブレインハイム（ ）（21歳）

背は低く、赤茶色のボブガットで微塵のやる気の感じられないオレンジ色の瞳の女性。

主にナイトメアより、それに搭載する武器に関しての若きスペシャリスト。

毒舌であり、本人は病氣のせいだと言っているが、事実かどうかは不明。

優秀な科学者ではあるが科学が嫌いで、KMFの開発も嫌々している。

だが家が貧しいため給料がいいこの仕事をして仕送りをしている。完璧主義者もある。

嫌いなものは科学。

STAGE 05 【騎士が仮面で捧ぐ】（前書き）

* 誤字・脱字の指摘おねがいします*

STAGE 05 【騎士が仮面に捧ぐ】

【トウキョウ租界・軍事裁判所】

「板木スザク一等兵、第十一方面軍行き重要1075、クロヴィス
殿下殺害容疑については、証拠不十分のにつき、釈放とする」

裁判の結果、無罪放免となつた彼は、久々に自由になつた。

ゼロの件に関しては何度もしつこく尋問されたのだが、軍事裁判はあつたりと終わつた。

そのあまりのあつけなさに「どうして…いきなり…」と思わず彼は呟いてしまう。

あまりに早く終わつてしまつたので、迎えに来てくれるはずのロイド達の姿はまだなかつた。

仕方ないのでしばらくそこいら辺でぶらぶらスザクに、思わぬハプニングが襲つた。

「どうぐだわーーいつーーあぶなーーいつーー」

スザクは驚いて声のする方・・・つまり上を見た。すると一人の綺麗なピンク色をした髪の女性が、上から落ちてくるではないか。

彼はその光景に驚いたが、女性を見事お姫様だっこでキャッチした。こうしてスザクとコーフェミアのイチャイチャ（？）Todayが幕を開けるのであった。

一方その頃
…

レイはいつものように特派へと顔を出したのだが、ロイドとセシルは枢木スザクを迎えて行くということなので、休みとなつた。

「…………」

そんな彼はロイドに血圧として『えられたマンションの一室の玄関に立ち渴んでいた。

といつのも、なぜカリビングまで続く廊下に、ずらりと段ボールの山が大量に積まれているのだ。

「ああ、おかえりなさい」

立ち尽くす彼にリビングから顔を出した新任の研究員、フラー・ブレインハイムが声をかけた。

「……これはなに?」

レイはリビングに足を進めながら彼女にきいた。

「聞いてませんか?主任があなたと一緒に住むよつこと、ふぞけたことをぬかしていたんですけど」

「なんですか?」

「2人分の家賃を出せるほど特派の予算に余裕がないことがあります

「じゃあフラーちゃんが別の場所に自分で家賃払って住めばいいでしょ？」

「却下です、私も無駄遣いはしたくありませんし、文句があるなら
あの人間破綻者 ロイドに言ってください、あれのランスロット
に予算を使いすぎてるせいなんですから・・・それか何か問題でも
？」

「いや、いくらなんでも男女2人で一つ屋根の下ってのは・・・」

それをきいたフラーは、なぜか段ボールを開けていた手を止めた。
そして彼をじーっと見つめ、「そうですね・・・あなたの顔の作りはい
いですし・・・」と呟いて無表情で舌舐めずりをしたのを、彼は見
なかつたことにした。

レイは初めてフラーを見たときもそう思つたのだが、つべづく彼女
のことは苦手だ。

彼がそんなことを思つていると、彼女は唐突に話を切り出した。

「そういえば、あなたでしたよね？私のナイトメアに乗るのは・・・

「

「ナイトメアー？」

その単語を聞いたレイは目を輝かせる。

「あっ、はい・・・それでその最終的な調節が必要ですから、後でデータを取らせてください」

「もつちゅうと

あまりにウキウキしているレイを見たジルは地味に引いた。まあ正直、研究やＫＭＦなんてどうでもいいが、彼女はやるからには徹底的にやる完璧主義者なのだ。

あのＫＭＦが彼によつて完成するのなら・・・
そう思ったフラーはため息を一つ吐いて、段ボールの選別を再び始めた。

ルルーシュは学園内の中庭にあるベンチに腰掛けパソコンを開いていた。

彼は先日、自分が助けた親友、枢木スザクのその後の処分について調べていた。

しかしこれといった情報はなく、おそらく自分が真犯人だと名乗り出たことで、無罪になるだろうとは思っているが、それでも心配であった。

「ルルーシュ君……今いい？」

そしてそんな彼に、一人の女性が遠慮がちに声をかけてきた。

彼女の名前はカレン・シコットフェルト。

表向きはお淑やかで病弱なお嬢様だが、裏ではレジスタンスで“紅月カレン”としてテロ活動を行つてている。

彼女とはシンジュクで巻き込まれた際に目撃しており、ルルーシュ自身も正体がばれそうになつたが、何とか誤魔化して今に至る。

「んっ？ なに？」

「「」の前の電話のことなんだけど……」

「電話？」

「その・・ほら、バスルームで・・・着信履歴ってわからない?ち
ょっと連絡を取りたくて・・・」

「学校のだからな・・・俺の方では・・・つー?」

ルルーシュはカレンとやり取りをしながらパソコンを閉じ、ふと顔
を上げると、なんとカレンの背後で呑気にくるくると回っているC
Cがいた。

「(あの女つ・・・!-)」

彼はあまりに軽率な彼女の行動に怒り、おもわず膝の上の拳に力が
入る。

「んつ?なに?どうかした・・のうえー」

そんなルルーシュの様子に気づいた彼女は後ろで何があるのかと思
い、振り返りうつすると、彼は彼女の顔を無理やりこっちに向けた。
そして背後のC・Cは連れ戻しに来たジルによつて引きずられて回
収された。

「ねえ・・・」

「ん?」

「これは何?」

「ああ、なんなんだろ? うな・・・」

こうしてルルーシュはカレンへの言い訳を必死で考え、さらにはなぜか悶々として不機嫌なシャーリーをなだめる羽目になつたのであつた。

「馬鹿かお前は…ふうふう出歩くな!」

「いいだらう? 学校の中へひこ・・・堅い」と叫つな

中庭で C・Cを見たルルーシュは怒った様子でジルの部屋に来て、C・Cと言い争っていた。

なぜルルーシュが C・Cがジルの部屋にいるかわかったのかと言つと、C・Cを回収したジルが、彼の携帯に連絡を入れたのだ。そんな彼女の部屋はとても殺風景であり、机と椅子とベットがそれぞれ一つずつと、クローゼットしかない。

そしてその中の机の上でたくさんの工具を広げて、なにやら黙々と作業をしていた。

「全く……ジル、こいつの監視を頼んだだろ……」

「えーと……少し田を離した隙に……」

ため息をついて頭を押さえるルルーシュに、ジルは大変だなあと思いながら苦笑いして言つた。

「ところで、お前は何をやつていろんだ?」

そして C・Cはまるで何事もなかつたかのような態度でジルの後ろから机を覗き込むよじこきいた。

「これ?まあ平たく言えば、新型の銃かな?」

「銃?」

それを聞いたルルーシュも額に皺を寄せながらも、興味深そうにきき返す。

「一般的な銃つて、リニアモーターで加速して弾丸を射出するでしょ?でもこの銃は弾丸の後ろに取り付けたサクラダイブを起爆させて弾丸を発射するの」

「お前そんなことができるのか!-?」

ルルーシュは驚いた。

確かに自身も銃火器に対しての知識はあるが、流石にそれを作るまでの技量はない。

それが彼女にあるとしたなら、きっとそれは・・・

「ええ・・・私の知識の一部みたいね・・・ナイトメアも一から作るのはちょっと厳しいけど、改良するくらいの知識は持ち合わせているわ」

そんなことを淡々と語るジルの顔は、やはりビビが悲しそうだった。

そしてシ・ヒは話を反らすよつてふと疑問を口にする。

「だが、その銃と今までの銃の何が違うんだ？ 弾を撃つことは変わりないだろ？」

「コイルガンってのはそもそも、弾の速度が遅いのよ・・レールガンなら理論上は光速に近いスピードで射出できるけど、どうしても大型になつて持ち運びは不可能だし・・でもこの銃ならそこまでの射出速度を得ることができるわ」

「じゃあわざわざサクラダイトなんて使わなくても、火薬で良かつたんじゃないのか？」

「・・心配り・・かどうかは不明だが、話題が変わったことにほっとしたルルーシュが、これ幸いとばかりに続けてジルにきく。

「いいえ、火薬だと熱にほとんどのエネルギーを使つてしまつから、威力が落ちるの・・その点サクラダイトはほぼ爆発にエネルギーを費やせるから・・でもそれに耐えられる構造と素材がなかなか難しくてね・・まだ試作品の段階」

そう一通り説明を終えたジルは、椅子の背もたれで大きく背伸びをした。

ルルーシュは額に寄せた皺をさらに寄せた。
なぜ彼女はそんな物騒な物を作っているのか。
疑問に思つた彼はジルに問う。

「でもなんでそんなものを？」

「私はあなたの・・ゼロの騎士になるといつたでしょ？」

そう言いながら彼女は机の横に立て掛けであつたサーべルに手を伸ばし、それを鞘から抜いた。

「・・・そうだったな」

全く持つて矛盾している。

自分から巻き込んでおいて、彼女を心配するなど・・・
そんな風に思ったルルーシュは自嘲気味に笑つた。
するとそんな中、ピンポーンとインターホンが鳴つた。

「おひ、私のピザだ」

「（またか・・・）」

そもそもピザを玄関に取りに行くこを見ながら、やつと思つて
人であった。

【特別派遣嚮導技術部】

「わあ・・・」

「これが、私の作った第7世代型KMF、ベティヴィニアです

特派に戻ったレイは、田の前にある機体に目を輝かせていた。
見た目はほぼランスロットと同じだが、機体色はダークグレイで、
少しばかりランスロットより重厚な作りになっている。

「機体はほぼランスロットを流用していますが、武装はまるで違います・・これは狙撃に特化したKMFです」

「狙撃？」

「はい・他にも試作機はありましたが、あなたのシユミレーションの結果をみると、命中率だけはズバ抜けて優秀ですので・・この機体との相性もいいと思いまして」

「へえ～」

彼はフラーが手渡したマニュアルを楽しそうにペラペラと捲めくっている。

その様子を見ていたフラーは田の前のパソコンにデータを入力しながら、ふと疑問に思った。

ロイドやセシルから聞いた話では、彼は全く過去の記憶がない。

常人・・・いや、自分のような異質な人間でさえ、もし記憶がなかつたらとすると、多少なりとも気分は暗くなるものだろう。

彼はそれを隠しているとするのなら、それはそれで大した役者ではあるが、彼女には微塵もそんな様子は感じられなかつた。

どうして彼は自分という存在がこんなにも曖昧なものとなつているのに、平氣なのだろうか？

もはやそれは彼女から言わせれば異常としかいいようがない。

だがそんな彼だからこそ、彼女は何故か魅かれるのを感じた。

それは愛でもなく友情などという大凡 おおそよ 自分に持ち合わせ得ないくだらない感情などではないが、確かに心の内にはあつた。

「（・・・理解不能ですね）」

そう思ったフラーは無表情でレイを見た。
彼はすでに意気揚々とショミレーターに乗り込んでおり、後は彼女
がプログラムを起動させるだけだった。

そうだ、科学者に感情など必要ない。

そんなものをまともに持ち合わせていたらやつていいけるものではな
い。

自分たちは人殺しの道具を作っているのだ。

だから自分は科学が嫌いなのだが・・・

フラーはそうして邪念を払いのけると、ショミレーターの起動スイ
ッチを押した。

【アシュフォード学園・ジルの部屋】

「・・・・・ふう・・・・」

C・Cの脱走事件後、ジルは自室で黙々と作業を続け、気がつけば窓の外で日は傾いており、空はすでにオレンジ色に染まっていた。彼女は綺麗だなと思いながら椅子から立ち上がりそれを見ていると、誰かが扉をノックした。

「ルルーシュだ、今いいか？」

「ええ・・・どうぞ」

「入る・・・ぞつー？」

部屋に入ったルルーシュは目の前の光景に啞然して、顔を真っ赤にした。
そこには髪を一つに結び、下着姿で彼に背を向けて立っているジルがいたのだ。
そしてそんな彼女の足元の床には、汚れた作業着が脱ぎ捨ててあった。
そしてそんなルルーシュをお構いなしに彼女が振り返ると、彼は慌てて顔を背けた。

「なつ！ジル！なんでそんな格好でつー？」

「えつ？ああ……服が汚れたから洗濯しようと思つて……」

「じゃあ服を着ろーとこつより着てから俺を部屋に入れろー。」

「はいはい……それで、なんの用なの？」

ジルはめんどくせにズボンの上に脱ぎ捨ててあったバスローブを着ながらきいた。

「いや、君についていろいろ知りたくてな……」

「ふふっ……意外に大胆ね？ちなみに私はたぶん“初めて”よ？」

「初め……ってそんなことをきいているんじゃないっ！――／＼／＼

／

「あら残念」

最初はジルの言つている意味がわからなかつたルルーシュだが、その意味を理解すると、再び顔を赤くした。

その様子を見た彼女は半ば予想通りの反応に思わず笑つてしまつた。

「俺が言いたいのは君の知識に関してだ・・・そこの銃もそうだが、もしブリタニアの実験だとしたら、君に植え付けた物はそれだけじゃないはずだ」

「・・・そうね・・私が持つてているのは、武術、剣術、暗殺術、戦闘の指揮、兵器、KMFの操縦と科学技術かしら?後は異常な身体能力と、傷の再生スピード?」

「傷の再生スピード?」

「ほり、こんな感じ」

そう言つてジルは机の上にあつたカッターで自分の腕に切り傷をつける。

するとそれはみるみるうちに元通りに戻った。

「これは・・・あのじ・じもシンジユク事変の際に俺を庇つて額を撃ち抜かれていたが、死んでいなかつた・・・もしかしたらこれと関係あるのか?」

「わからないけど、私は不死ではないわよ?」

「どうしてわかる？」

「なんとなくそう感じるの・・・」

まるで遠くを見るように手を締めながらそう言つた彼女に、ルルーシュは触れてしまえば壊れてしまいそうな危うさを感じた。
自分はナナリーの未来のために、彼女は自分の未来のために行動を起こした。

それが間違いだつたとは思つていいない。

自分たち兄妹には選択できる未来が限られている。

アシュフォードもいつまで後ろ盾となってくれるかわからない。

生きるためににはブリタニアという国は邪魔でしかない。

だが彼女は違う。

ミレイが彼女の身元について警察に届け出たが、軍は一向に彼女を連れ戻そとはしない。

ということは自分がクロヴィスを殺したことにより、彼女についての実験は断念されたのだろう。

なら別に隠れて生きる必要はないのだ。

普通にこの学校で悠々と暮らせばいい。

彼女の能力ならブリタニア軍の中でもトップの方に行くこともできるだろう。

しかし彼女は自分とともにここに反逆することを決めた。
一体なぜなのか・・・？

「なあジル・・・どうして君は俺に力を貸してくれる気になつたんだ？」

ルルーシュはびりしても気になり、口を開いた。

「…………そつね・・強いて言つなら“生きてみたかった”かし
ら」

ジルはそう言ってワインクをすると、それ以上は語りうとはしなかつた。

だがルルーシュにはその言葉の意味が何となく理解できた気がした。

「ほり、彼が車で話したレイ・チエスター君」

「よひじく

「ハリハリナ

純血派内のもめ事をを諫めたスザクは、特派でレイと初対面をし、固く握手を交わしていた。

ちなみにフラーは奥で先ほどショミレーーターでとつたデータをもとに、ベティヴィアの最終調整をしている。

「本当よかつたよ、君に一つ貸しを作ったまま死なれぢや困るからね」

「貸し?」

レイが言ったことに全く心当たりがないスザクは、首をかしげている。

「君でしょ? ランスロットの適合率94%って・・僕は92%で2%君に負けててね・・だけど負けっぱなしは嫌いだからさ・・・? 戦場では背中に気をつけた方がいいよ?」

「やつこいつレイがニヤリと口元を歪め邪悪な笑みを浮かべる。スザクはそれを見てゾクッと背筋に寒気が走るのを感じた。

「レイ君…」

「冗談、冗談…やむなしありやんと正面からやられて

「やつこいつ問題じゃないでしょー?」

しかしいつものよつてセシルが怒ると、彼はいつものようなおどけた優しい笑顔に戻る。

「(彼の素顔はいったいどちらなんだろうか……)」

スザクは心中でそんなことを考えながらレイがセシルに鉄拳制裁を加える姿を見ていた。

STAGE 05 【騎士が仮面で捧ぐ】（後書き）

やつとオーリケンFが出てきました！

活躍はもう少し後なんですけどね。w

今回は一人の日常的な部分が書けたらいいなあ。

と思つたんですけど、レイとオレンジとの出会いとか、ジルとC.C.がルルーシュを尻に敷く話とか、まともに書いたら相当長くなりそうだったので大幅にカットしました。

いつか閑話として皆様に提供できたなと思つておりますw

武器に関してはいろいろ調べて書いてはいるんですけど、どうしても辻褄が合わないところが出てきちゃうんですよね。

まあもしさうこうといふを見つけても、皿をつぶる方向でお願いしますw

でわノシ

STAGE ?? 【生徒会のクリスマス】（前書き）

みなさんメリークリスマス
完全なるお遊び投稿ですが、お楽しみいただければ幸いです。w

STAGE ?? 【生徒会のクリスマス】

【アシュフォード生徒会室】

「会員は一体これは？」

生徒会室に入ってきたルルーシュは目の前の光景に危機感を覚えた。そこにはサンタの格好をした生徒会メンバーの女子がいたのだ。

そしてその中で一番異質なのがジルだ。

彼女以外はみな、普通にミニスカートのサンタなのだが、彼女だけは胸だけが隠れており、腹部は露出し、ミニスカートが他よりさらりと若干短い。

見えている。

それが日に飛び込んできたルルーシュは慌てて田を反らし、顔を赤らめる。

「なつー！ジルー！お前はまたそんな格好でつー！／＼／＼」

「本当にみんな同じサンタ服にするつもりだったんだけど、買いにいった時にこれを見つけてね？それで一着買って来たんだけど、シヤーリーと一緒にナとカレンは恥ずかしがっちゃって・・・」

「あっ・・・当たり前ですよっ！！／＼」

ミレイが残念そうに嘆息と、シャーリーが顔を赤面して言った。

「ジル、そんなの着てて恥ずかしくないの・・・？」

「えっ？何が？動きやすくていいと黙りけど・・・」

カレンが疑問に思つてジルにきくと、彼女はキョトンとした顔で答える。

「そ・れ・でえ～・・・ルルーシュはこれねっ？」

そう言つてニヤリとしたミレイによつてルルーシュに手渡された物は、なぜかクリスマスツリーのコスプレだった。

「なんなんですかこればっ！？」

「何つて、クリスマスツリーよ？」

「わうじやなくて！なんでツリーなんですかっ！」

「いいじゃなあーい！バカっぽくて」

「なつ・・・馬鹿つて・・！」

そんな横暴なミレイに、ルルーシュが言い返そうとするが、突然部屋の扉が開いた。

「おー…やーとルルーシュも来たみたいだな」

「お兄様がいるのですか？だから先ほど部屋にいなかつたんですね

「全く・・せつかくのクリスマスなのにどこに行つたのかと思つたよ」

「あーあ、僕もサンタがよかつたなあー・・・」

「スカートでもよければいつでも私のと交えてやるだつ。」

入ってきたのはリヴァル、ナナリー、スザク、レイ、そしてC.Cの5人で、リヴァルとスザクとレイはトナカイ、ナナリーとC.Cはサンタの格好をしている。

「C.C.! なんでお前がここにいるつー! ?」

「細かいことは気にするな、番外編でよくあるお決まりだ、文句があるなら今この後の展開に苦悩している作者に訴え」

「…………」

無言な彼に、すいませんルルーシュさん……と思つ作者。そこは置いといて……

「とにかく!! 僕はこんな物着ませんから!!」

「ダメ!! スザク君!! レイ!! ジル!!」

「――イヒス・ニア・マジヒスティ――」

「おー……間違ってる……間違ってるぞお前たち……それは皇帝に対するの……つてどわふつ――」

ミレイの命令にきびきびと答えた3人は、ジルは背後から羽交い絞めにして、レイとズザクは暴れる彼の足を抑えつける。

「おひ……おい……ジル……なにかあたつてんぞつ――／＼

背中に感じた柔らかい2つの感触に、ルルーシュは顔を再び真っ赤にする。

そしてそんな彼に更なる魔の手が忍び寄る……

「ああ～、ルルちゃん? お着替えの時間ですよ～?」

クリスマスツリーの衣装を手に持つて、ニヤニヤ近づいてくるミレイ。

もはや成すすべなく冷や汗をかくルルーシュ……

「うよつ……余韻つ……いつ、いやつ……止めへくださこつ……いや
ちよつ……やめ……ナツ……ナナリイイイイ
ツツツツ……――」

数分後 . . .

その場にいた全員が、ルルーシュの姿に大爆笑していた。

「ふはははははっ！－！－！ルツ！ルルーシュっ！－！なんだいその格好は
つ！？」

「その格好つてお前たちが無理やり着させたんだろうがっ！－！」

「仮面の英雄も形無しだな？」

「黙れ魔女っ！！」

スザクとし・このからかいに彼は額に青筋をたてて怒鳴った。
しかしその格好はあまりに滑稽だつた。

衣装に開いた穴から出た顔は緑一色にペイントされ、頂上に飾つて
ある星がピカピカ点滅している。

「私も見たかつたです、お兄様のそんなバカっぽいお姿」

「ナツ・・ナナリー・・・お前まで・・・」

自らの最愛の妹も敵にまわつてしまい、もはやルルーシュは半泣き
状態だ。

「じゃあみなさん揃つたことだしつ！アシユフォード学園生徒会に
よるクリスマスパーティーを始めまーすうつー！」

全員（ルルーシュを除く）が拍手をする。

「そしてえーーーせっぱりクリスマスと言えぱプレゼント回しじ
つ！？」

「プレゼント回し？」

ミレイのやの言葉にレイが首をかしげる。

「そいつ……音楽が鳴っている間、全員で自分の持っているプレゼントを回して、音楽が止まった時に持っているプレゼントが、その人のクリスマスプレゼントってわけ」

「なるほど……」

リヴァルが納得したようにポンと手を叩く。

「とゆーことで、姉血脉プレゼントは持ってきたあー…？」

「「「「「「「せーこー…」「」「」「」「」「」」」

「ちよつと待てっ……俺はそんな話聞いてないだつー。」

ルルーシュがミレイのこきなりの発言に驚く。

「クリスマスと書いたらプレゼントでしょ？用意していないあんたが悪いっ！！」

「どういう理屈ですかっ！？」（くつ、マズイ・・・）のままでは難癖をつけられて罰ゲームといつ流れになってしまつかもしない・・・いつたいどうすれば・・・・・・はつ！わうだつ！！あいつがいたっ！）

「フフフフ・・・フハハハハハハハハ！」

「ルツ・・ルルーシュが壊れた・・・」

急に笑いだすルルーシュにカレンがドン引き。

「残念でしたね会長・・・私には“やつ”がいるから・・・ジョンレミア

「！――！」

「イエスッ！――コア・マジヒステイツ！――！」

当たり前のようにガツシャーン！と窓ガラスをブチ破って入ってきたオレンジ。

そして当たり前だが怒るマレイ。

「ちゅうとーーーひの学園の窓を割らなこでよつーーー。」

「ん？すまなかつた・・たしかに窓ガラスには借りがある・・情もある・・引け目もある・・・しかしこの場は・・忠義が勝るつ！..」
「！」

「いや・・意味わかんないから・・・」

訳もなく興奮するオレンジにカレンのシシロリが入る。

「てこりうか、オレンジさんつて出番早くないですか？まだ“ぽべつ”のシーンもないですよ~」

「わいわい、ギアスキヤンセラーも付いてるし」

シャーリーとレイが指摘する。

「全力で気にするな、作者の都合だ」

「といふでシホレニア、どうせ先の会話も聞いていたのだろう？私の言つたこととはわかるな？」

「はつ……陛下はクリスマスプレゼントを用意されておられないと
の情報を、この場にしかけた多数の盗聴器により小耳に挟みました
つ……」

「盗聴器では小耳に挟むとは言わなこりしよ……」

恭しくおまかくオレンジに、カレンのシシ「//」が再び破裂する。
ビーナスの話では彼女がシシ「//」母のよひです。

「それでプレゼントは？」

「アーリア、ヤマトアリーフ……」

そう聞いてオレンジがルルーシュに差し出したのは、綺麗に包装さ
れた小さな小包だった。

「……小さくないか？」

「はい、しかし物は上等です」

「なりよこ、下がれ…」

「はつ…」

そう言つてオレンジは来た時とは別の窓ガラスをブチ破つて出て行つた。

「よしハ…これで条件は全てクリアされたつ…じゃあ始めようじゃないか?フフフ…」

「…・完全にルル壊れちゃつたね

「ええ…」

「やう?…つもあんな感じじょ

なぜかキャラの変わつたルルーシュを見ながら、シャーリーとカレンとジルは「ん」と話してのであつた。

「でわでわあ～…まあ土産物販売好いなプレゼントを一つずつお持
ちください～…」

「…………」

ミレーの合図で、皆それぞれ好きなプレゼントを手にす。

「ミュージック～スタートっ！！」

ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴るう
今日もたのつしいクリスマスウ

「はい、ストップ…じゃあみんな回し終えたところです…最初にプレゼントを開ける人ー！」

「はいはーいっ…！」

勢よく手を挙げるレイ。

彼の小包は赤くてやや小さめの小包だ。

「じゃあレイー！」

ミレイの許可を取った彼は、包装を破つて中身を取り出した。

「うわ…これは……！」

小包の中に入っていたのはミニチュアの紅蓮人形だった。ナイトメアが大好きなレイにはさぞ興奮するプレゼントだろう。

「これってだれの？」

「私です・・・」

ミレイがきくと、カレンが恐る恐る手を挙げる。

するとレイが彼女の元にすつ飛んでこそ、思い切り抱きしめた。

「ありがとっ！カレンちゃん！」

「なっ・・・・・・・ひょっと離しなむことつ・・・・・・・」

「うふっ・・・・」

とつものことにカレンがレイの脇腹に強烈なミドルキックを放つたため、彼は腹を抱えてその場につづくまつた。そしてそんなカレンを羨ましそうに見る二ナに誰も気がつかなかつたのであった。

「まあ馬鹿はほっておいて・・・次は？」

「じゃあ次は私！」

そつこつて今度はシャーリーが手を擧げる。
彼女の持つている箱は横長で、持ち運べるよひな持ち手がついていた。

「わあ～！おこしそお～！」

箱を開けたシャーリーは、思わず嬉しそうに声をあげた。
その中にほんのりじっとマスター・デーナツが入っており、甘くていい匂いを放つていた。

「それは私のお気に入りのマスター・デーナツの詰め合せよ」

「ありがとお～！」

ジルが説明すると、わざわざシャーリーは一つ取り出してかぶついた。

「あ・・・おこしそ～！」

「食べ過ぎて太らなによいねえ？」

「うう・・・・・

嬉しそうなシャーリー、「レイがニヤリと毒づく。

「じゃあ次は俺なつ！」

そう言ってリヴァルが小さい縦長で長方形の箱を開ける。するとそこには銀のネックレスが入っていた。

「これだれの？」

「私ですう〜」

リヴァルが尋ねると、なぜか残念そうにシャーリーが答える。

「残念だったわねえ〜？ルルーシュに届かなくて」

「へつ〜?いやつ・・ちつ・・ちがいますう一つ〜!〜//

相変わらず!!レイはシャーリーをからかって遊んでいる。そしてシャーリーの方は顔を真っ赤にして必死に否定する。

「じゃあ次は私が・・」

そう言つたのはカレンで、彼女の持つている箱は、他のものよりも少し大きい。

そしてそれを開けたカレンは、驚きの声をあげた。

「わあ～す～い！」

「本当だあ！こんなに折り鶴がいっぱい！」

「それは千羽鶴といって、日本の伝統文化だつて咲世子さんが言つていました」

みんながカレンの開けたプレゼントに驚いていた、ナナリーが説明した。

「これはナナリーが？」

「はい、咲世子さんにも手伝つてもらいましたけど・・・せついえ、この千羽鶴つて、病気が早く治りますよつておまじないもあるんですよ？だから身体の弱いカレンさんに回つてよかつたです」

「ありがとう、ナナリー」

ナナリーは笑顔でカレンにそう言つと、彼女もそれに応えるように、優しい笑顔をナナリーに向けた。

いつの間にか復活したレイは、その横でルンルンと紅蓮人形で遊んでいた。

「じゃあ次は二 ナツ！…」

「くつ！？」

突然ミレイに指名された二 ナは、戸惑いながらも小さな箱を開けた。

するとそこにはナイトメアの起動キーが入っていた。

「これは…・・・」

それを見たその場の全員が固まる。
1人を除いては。

「あー！それ僕の僕のーほらあそーー。」

そういうて彼が外を指差すと、そこには二つの間にかサンタの格好をしたザザーランドがあつた。
しかも白くて長い髪まで生えている。

「なにこれ・・・」

「ダメじゃないかレイ！勝手に軍のナイトメアを持ち出しちゃつー！」

その異常な光景にミレイや他のメンバーも引いており、スザクはレイに注意をする。

だがニ ナは「レイ君のプレゼント・・・」と呟いて呆けた顔をしている。

「はあ～・・・じゃあ次は私が開けます！」

ミレイは思わずため息を吐くと、自身のプレゼントを開ける。

それは本で、表には『簡単！フレイヤ作成マニュアル！（キット付
き）』と書いてあった。

「これって・・・」

ミレイの顔はまさかといった感じで引きつっこる。

「うん！みんなに核分裂の素晴らしさを知つてもらいたくて・・・」

「 知らなくていいですっ!!」

[]

これが全員が一致団結した瞬間であつた。

そして次はC・Cなのだが、彼女はプレゼントであつた手紙を無表
情で読んでいた。

• • • • • • • • • • • • • • •

「あつ！それわつ！？」

なぜか慌てるリヴァル。

だがC君はそんなことお構いになしにその手紙をできるだけ細かく破り棄てた。

「なんだつたんだそれ？」

「内容などもはや覚えていないが、相当気持ち悪かった

「お・・俺の会長への手紙が・・・」

リヴァルは。『こんな感じで地面に伏して居たのであった。
そんな中、落ち込んだリヴァルを半ば無視する形で、C.C.があち
むろにスザクにきく。

「なんだ？お前は開けないのか？」

「いや、だつてこれ・・・」

スザクは苦笑いしながら持つて居る見慣れた正方形の平たい箱を見
る。

それはどこかで嗅ぎなれたチーズの匂いが嫌とこぼれ漂ってきた。

「これ・・・ひでしょ」

「正解だ、よくわかったな」

「いや、わかるよ・・・いろんなもの想つかないでしょ？」

「こな物とは失礼だな、まだ中も見てないくせに」「

「いや、見なくてわかるから・・・」

「スザク、これでいつも俺の大変さがよくわかるだろ?」

「そうだね、ルルーシュ・・・」

「おっ！おー！なんだそれはー！」の私がせつかく世界で一番崇高な食べ物であるピザを持ってきてやったのだぞ！！」

まあ確かに何百年も生きてきたであろう不老不死の魔女が言つて、説得力がある。と思う作者。

結局、その箱の中身は、こ・この腰袋に収まることになった。

「じゃあ次は私

そう切り出したのはジルで、彼女のプレゼントは、少し大きな紙袋に入っていた。

そしてそれを彼女が取り出すと、その場のみんなが固まる。

「・・・これだれの?」

ジルが両手に持つて広げたものは、やけに露出度の高いメイド服だった。

そんなメイド服の送り主は意外な人物だった。

「あつ、それは僕だよ」

「スッ！スザクっ！？まさかお前がそんなやつだったとは・・・見損なったぞっ！？」

「変態」

「馬鹿」

「獸」

「ウザク」

「ちよつーーみんなひどっーー。」

次々に彼を罵倒する言葉に慌てるスザク。

「ジル…これはクリスマスプレゼントなんて何を選んでいいかわからなかつたから、ロイドさんにきいたらこれにしゅって言つから…」

「やつぱり」

そんなスザクの言い訳に、どうやらレイは納得したようだ。そしてそんなことをしている間に、ジルはいつの間にかそのメイド服に着替えており、C・Cが少し羨ましそうな顔で見ていた。

「どうですか?」主人様あ…？」

「…「ぐはああ…」」「…」

ジルの上目使いに男（オヤジ属性のミレイも含む）は9999のダメージ。

そんな馬鹿共はさておき、次はルルーシュの番だ。
彼もジルと同じような、少し大きな紙袋に入っていた。
そしてそれをルルーシュが取り出し、広げると、今度はその場で彼だけが固まる。

「なんなんだこれは……っ！」

「ああ、それ私の」

そう言つたのはミレイで、ルルーシュが持つていたのは、淡い紺色を基調としたドレスだった。
そして本日2回目のお約束。

「スザク君！…レイ！…ジル！…」

「…イエス・ニア・マジヒステイ！…！」

「おい！…間違つてゐ！…間違つてゐるぞお前たち！…それは皇帝に對しての…・といつよつわつときもこんなやり取り…つてどわふつ！」

ミレイの命令にきびきびと答えた3人は、ジルは背後から羽交い絞めにし、レイとスザクは暴れる彼の足を抑えつける。

「おっ！…おい！…ジル！…またなにがあたつてゐやつ！…！」

背中に感じた柔らかい2つの感触に、ルルーシュは顔を再び真っ赤

にする。

そしてそんな彼に更なる魔の手が忍び寄る・・・

「ああ～、ルルちゃん? 2回田のお着替えの時間ですよ～?」

ドレスを手に持つて、一いやいや近づいてくる//レイ。

もはや成すすべなく冷や汗をかくルルーシュ・・・

「ちよつ・一・会長つ・ー・いつ、いやつ!・止めてくださいつ・ー・いや
ちよつ・ー・せめ・・・ナツ・・ナナリイイイイイ
ツツツツ!・ー・!・!・!

「わあ～・・相変わらず様になつてゐるわねえ～」

「本當ですよ～、私、自信なくしちゃいました」

「わつ・・そんなにジロジロ見るなつーー！」

今度は誰も笑ひことなく、ミレーヤとシャーリーはまじまじとルルーシュを見る。

「だが相変わらず性格は最悪だな」

「お前にだけは言われたくない」

○・○の皮肉にそつ返すルルーシュ。

「私もお兄様の女性姿見たかったです」

「心配しなくともあなたのお兄さんはシスコンだからいつでも着てくれるわよ?」

「どんな理由だそれつ！？」

少し寂しそうなナナリーの手を握つてそう言つたジルに、ルルーシュがつっこむ。

そしてついに最後のプレゼントになつた。

「最後は私ですね？」

「てごい」とは送り主は「俺だ」

ミレイの言葉を遮り、ルルーシュが一步前に進む。ナナリーが持っているのは、先ほどオレンジが持ってきた箱だ。彼女はゆっくりとそれを開けた。

「・・・・・・・・・・みかん？」

しばしの沈黙

「ジヒルリトウ……」

「イエスッ！－ゴア・マジヒステイツ－！－！」

ルルーシュが呼ぶと、当たり前のようにガッシューンッ！－と再び別の窓ガラスをブチ破つて入ってきたオレンジ。

「なんなんだこれは！？」

「はっ！－それは今年、我がゴットバルト農園で収穫した、一番の上物のみかんでござります！－！」

「馬鹿かつ！－馬鹿なのかお前はッ！？だれがクリスマスのプレゼントにみかんをもらつて喜ぶ馬鹿がいるつ！？しかもナナリーだぞつ！？」

「もっ！－申し訳ござりませんでした！－！」

オレンジは勢いよく床に頭を擦りつけて土下座をする。
こつじて、なんやかんやでクリスマスパーティーは幕を閉じた。

STAGE ?? 【生徒会のクリスマス】（後書き）

どーしてもやりたかったんです！！

とてつもないグダグダ感の話をつ！！

オレンジは友情出演ですね♪

マスター・ドーナツはとあるドーナツショップのパクリで、ジルお

気に入りのお店という設定です♪

好評でしたら、こういったイベントとの話も作っていきたいなと思つております。

STAGE 06 【奪われた仮面】（前書き）

* 誤字・脱字の指摘お願いします*

【アシュフォード学園】

「本日付をもちまして、このアシュフォード学園に入学することになりました、榎木スザクです、よろしくお願ひします」

ルルーシュは目の前で自己紹介をしている男に目を釘付けにしていた。

それは昔、日本とブリタニアの戦争で離ればなれになり、7年の歳月を経てシンジュクで奇跡的な再会を果たした親友だった。ついこの前も彼を助けたが、それはゼロとしてであり、彼は知らない。

「ところでスザク君、もう一人は・・・？」

どうやら転校生はもう一人いるらしいが、姿が見えないので教師がスザクに行方をきいた。

すると、何故か彼は少し困ったような顔をしている。

「えつ？ その・・・えつと・・・逃げました・・・」

「　　「　　「　　「　　「　　はい！？」　　「　　「　　「　　「　　「

思わずクラス一同が満場一致で声をあげる。

転校初日でサボるとは・・・ルルーシュ以上だ・・・と全員が思つたかどうかはご想像にお任せしよう。

「そこ」の廊下までは一緒にたんんですけど、『僕の自己紹介は君に任せること』とか言つて・・・」

「　　「　　「　　「　　「　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

もはや言葉にできないクラス一同であった。

そして自己紹介は終わり、今日もアシュフォード学園の一日が始まった。

しかし、誰も新しい転校生、枢木スザクに話しかける人はおらず、皆が彼を遠巻きで見ながらコソコソと話している。

無理もないだろう。

名譽ブリタニア人とは言え、元はイレブン。

しかも先日までクロヴィス殺害の容疑者として捕まっていたのだ。

「怖がってるだけじゃダメよー話してみればどんな人か・・・うつ？」

シャーリーはいつもの行動力（ルルーシュに関しては例外だが）を発揮して、スザクに話しかけようとするが、リヴァルがそれを止めた。

そんな中、スザクの傍をルルーシュが通り過ぎた。

思わず彼はルルーシュを見る。

すると彼はちらりと横目でスザクを見ると、襟元に手を伸ばし、一度だけクイッと上に持ち上げた。

スザクはハッとした。

それは7年間変わらぬ2人だけの合図だった。

【学園内・屋上】

「ふあ～・・・」

初日に自己紹介すらサボったレイは、独り屋上で大きなあぐびをしていた。

なぜ自分がこんなめんどくさいことをしなくてはいけないのかと、彼は心の中でずっとぶつぶつと文句をたれていた。まずはこうなった経緯を説明しよう。

スザクがコフイと出会つ

ユフィイがスザクを学校に通えるように取り計らつ

スザクがお節介でレイも通えるようコフイに頼む

レイはそれを断つとする

皇女殿下の計らいを断るなんて…とセシルに怒られる

結局通り羽田になる

といった具合だ。

「学校なんて通りへりこなりー田中シユミーネーター乗つてた方が楽しいのに・・・」

そんなことを呟いていると、突然屋上の扉らが開き、1人の黒髪の少年がやってきた。

その少年はレイの存在に気づくことはなく、そのまま屋上の手すりに腕を乗せてもたれかかった。

そしてしばらくすると、もう1人の見慣れた少年、スザクがやってきた。

2人は何やら親しげで、とても今日、昨日知り合ったようには見えなかつた。

ただでさえ、オープンな学風といえど、スザクにとつては友達を作ることは難しいだろうと思つていたので、レイは内心驚いていた。

「（昔からの友達なのかな・・・？）」

少し距離があるので、声までは聞こえないが、レイはその様子を影

から見ていた。

そのうち、黒髪の少年はその場を後にし、スザクが独り残された。それを見計らい、レイはスザクに忍び寄り、急に彼の前に姿を現した。

「スーザクちゃん」

「レイつー? いつからやー? つー?」

スザクは驚いているより、どうやら焦っているよう見えた。

「最初からこの屋上にはいたけど・・・なんかマズかった?」

そんな様子を不思議に思ったレイは、首をかしげてスザクにきいた。

「()の様子ならきいてなかつたみたいだね・・・」

逆にレイの様子をみた彼は、先ほどの会話はきかれていないようなので、ほっとした。

聞かれれば、彼がブリタニアの皇子であることがバレてしまう。そんなことは彼とナナリーのためにも、断じてあつてはならないのだ。

「その様子だと相当マズイ」と話をしたんだね？」

「いや・・・それは・・・」

いつもは気が抜けているが、意外と鋭いレイにスザクは冷や汗を流す。

「大丈夫！大丈夫！何にも聞いてないって！ただ正直スザクがこの学園で友達ができるなんて思わなくてね？」

「そつか・・・」

そう言ったスザクの顔は、どこか懐かしそうで、悲しそうだった。

「昔からの友達なんだ・・・」

「やっぱり・・・まあよかつたじやん？これでこの学園に2人の友達ができた」

「2人？」

「僕と彼」

「ふふ・・そうだね」

レイの言葉に、スザクの悲しい顔が笑顔が戻った瞬間だつた。

【クラブハウス・リビング】

その夜、ルルーシュはスザクを招いて、ナナリーと3人で久々に楽しい食事をしていた。

「スザクさん、今日は泊まつていけるんでしょうか？」

「スザクはもうこの学校の生徒なんだ、だからいつでも会えるよ」

いつもより楽しそうに話すナナリーをルルーシュは少し嬉しそうな顔で見ながら言った。

いつも周りの人間を気にして無理に笑顔を作っていることが多いナナリーが、今日は心底楽しそうに笑っているのだ。

「軍隊の仕事があるから、毎日は無理だけどね」

「軍隊……続けるんですか……？」

そんなスザクの一言に、今まで明るかつた彼女の表情は曇ってしまった。

「大丈夫！技術部に配置換えしてもらつたから、そんなに危なくな
いよ？」

「そりが、技術部か」

それをきいてルルーシュは安心したように言った。

ナナリーはまだ若干不安そうだが、ひとまず生命の危機はないのだ
ろうと思い、ほつとしていた。

そんな中、突然、リビングの扉が開いた。

「「「うおつー?」」

「どうかしました?」

ルルーシュとスザクはリビングに入ってきた1人の女性の姿に驚き、
目の見えないナナリーは妙な声を上げた2人を不思議に思い、訪ね
た。

そこには下着姿で、眠そうに目をこするジルの姿があったのだ。

「ジルっ!いつも服くらい着ると言つてゐるだろつーー。」

思わず慌てたルルーシュが言つた。

状況が読めたナナリーは静かに笑つている。

「だから取りにきたんじゃない」

それをジルは気にする様子もなく気だるそつに椅子にかけてあるバ
スローブを指差した。

「あの～・・・彼女は？」

顔を赤くしたスザクは田を反らしながらも、バスローブを着ている
彼女を横目でチラリと見ながらルルーシュにきいた。

「彼女はジル・フランゾワース、俺たちと一緒に住んでいる・・・
彼は枢木スザク、俺の昔からの友達だ」

「あつ、よひしく」

「わいわい」

そういつてジルとスザクは握手をした。

「でもどうしてここに住んでいるんだい？」

「それは・・・」

ルルーシュはスザクにきかれたことを言つてもいいのか、ジルに視線を向けて確認する。

「私は記憶がなくてね・・・行くところもないから、ここに住まわせてもらってるの」

ルルーシュのそんな目線に気づいた彼女は、それを自分からあつさりと言つてしまつた。

実際は別に女子寮に住めばいい話なのだが、ミレイが面白半分でジルを住まわせていることを、ルルーシュとジルは知る由もなかつた。それはさておき、スザクはそれをきて彼女と同じような1人の人間を思いだした。

「そういえば、今日いっしょに転校してきた僕の友達も、記憶喪失だつて言つてたけど」

「えっ？」

ジルはそれをきいて驚いた。

彼の話が本当なら、自分と同じように実験体となつた人間かも知れない。

そのことをスザクに話すべきかどうか迷つたが、情報の出所がC.C.のため、いろいろと詮索されたら面倒だと考え、言つのは止めた。ルルーシュもどうやら同じことを考えていたらしく、こちらを時折横目で見ながらも、彼女が実験体であることを話すことはなかつた。

「あの・・・ジルさん・・・その方と会つてみてはどうですか？ そう

すれば何か記憶を思い出すきつかけになるかもしませんし……
スザクさんも、その方に話して、頼んでいただけますか？」

「もちろんだよー。」

ナナリーがそう切り出し、スザクは笑顔でそれを了承する。

「そうね……私、お茶を入れてくるわ

「あっ、手伝うよー。」

ジルが、そう言って机の中央にあつたティーポットを持つと、スザクが立ち上がった。

しかしルルーシュがそんな彼を止めた。

「座つてろつて、今回はこっちがホストなんだ……お前、なんか大人しくなつたな？」

「君はがさつになつた

「ふふつ、はいはい」

そう言つてスザクは再び座り、3人で会話に華を咲かす。

そんな彼らの様子を少し羨ましく思いながら、ジルはティーポットを持つて奥のキッチンへと向かつた。

「あの男・・・シンジュクで会ったブリタニア軍人だろ?いいのか?」

そこにはいつもの拘束服を着たC・Cが、腕を組んでシンクにもたれ立つていた。

「彼はルルーシュにとつて相当大切な友達のようね・・・」

「なぜわかる?」

「ナナリー以外で、彼が他人にあんな顔を向けるのは初めて見たわ。」

「なんだ?嫉妬か?」

C・Cは口元に嫌らしい笑みを浮かべる。

「いいえ……ただ……彼らが少し羨ましかつただけ……」

「ふつ・・・・・それで?お前はかいわる?」

「……の笑みが嫌らしきものからなにやひゆみのあるものへと変わる。

「……だれであろうと、彼の邪魔をするなら……殺すまでよ……」

「……」

いつ言いながらお茶を入れる彼女の顔は、酷く険しいものだった。

「ほわあつ！！！」

このルルーシュの人生初の素つ頓狂な声で、ドタバタの一 日は幕を開けた。

「くそつ！猫のつ！分際でつ・・！」

奇しくも猫にゼロの仮面を取られ、必死に追いかけるルルーシュ。

「（ええい！）こんな時、テロリストがいれば包囲作戦を展開できるのには…」

そんなことを思いながら彼は猫を追いかけひたすら走る。

だが体力に関して全く無縁な彼は、逆に猫に遊ばれるようであつた。

「（カレン・・いやダメだつー）れ以上怪しまれぬのは・・・はつ
！そだつージルがいるじやないかつー」

ふと気付いたルルーシュは猫を追いかけながら懐からケータイを取り出す。

そしてジルの番号をプッシュした。

プルルル・・・プルルル・・・

そして肝心のジルは、自室でドーナツを呆けた顔で食べていた。これは最近彼女が商店街で見つけ、一目惚れした、“マスター・ドーナツ”的ドーナツだ。

プレーンはもちろん、チョコや、ホイップクリームが中に入っているものなど、形や味は様々で、その中でも彼女はチョコのかかった、もちもちした触感の“もっちりング”が大好物だ。

そして最後に残していたそれに手を伸ばした丁度その瞬間、ルルーシュから電話がかかってきたのだ。

一瞬ムスッとした彼女だが、しかたなく電話に出ると、なぜか電話の彼は息絶え絶えだつた。

『よつ・・・！よかつ・・・たつ！じつ・・・ジルつ！猫につ・・・！仮面つ・・・がつ・・・取られ・・・たつ・・・ってどじわあつ！…』

ブツツ・・・ツー・・・ツー・・・

「・・・・・はい
つ！？！？」

しばしの沈黙の後、ジルは思わず声を張り上げた。

ルルーシュは何かにつまずいてずつこけ、その拍子に電話が切れたらしい。

しかし今の彼女にはそんなことを気にする余裕もない。もし仮面が見つかったら彼はゼロとして捕まってしまう。断じてそれだけは避けなくてはいけない。

せっかく自身も今までいろいろと準備をしてきたのだ。今さら彼に捕まつてもううのは困る。

それにこれで捕まればあまりにマヌケだ。

焦った彼女は大好物のドーナツに手をつけるのを諦め、急ぎ猫を捕まえるべく部屋を飛び出した。

そんな最中、事態をさらに悪化させる校内放送が入る。

ピンポンパンボーン・・・

『ひひひ、生徒会長のミレイ・アシュフォードです・・・猫だつ！
！校内を逃走中の猫を捕まえなさい！部活は一時中断！協力したクラブは予算を優遇します！そしてえー・・・猫を捕まえた人にはスパークル・ラッキーチャンスっ！生徒会メンバーから、キッスのプレゼントだあ つ！・・・お ほつほつほつほつほつほ

！――！』

こうしてミレイの高笑いが学園中に響き渡り、この放送を聞いた生徒は、慌ててプールの飛び込み台から落ちた者や、お嬢様の唇を奪おうと躍起になった者、それを阻止しようとした者、思わぬ性癖をカミングアウトした者・・・反応は様々だった。

『猫を捕まえたら所有物は私に！私に！渡しなつ・・げほつ！げほつ！げほつ！』

「くつ・・一会展つ！余計なことをつーー！」

興奮しそぎてせき込んだミレイに、ルルーシュは悪態をつきながら猫を追う。

しかし途中で見失い、さらに必死になりながら猫を探す。すると校舎と時計台を繋ぐ渡り廊下の屋根の上で猫が走つて行くのが見えた。

彼がそれを追いかけると、そこでスザクと鉢合せた。
しかも時計台の階段の方を見ると、ジルがすでに階段を昇り始めていた。

一方その頃
⋮

「ん？」

レイは屋上で昨日と同じように授業をサボり、昼寝をしていました。

しかし、外がなにやら騒がしいことに気が付き、身体を起こして辺りを見渡すと、近くの時計塔の周りに人だかりができていた。

気になつてその時計塔を見てみると、そこには頭部は頂上のベルで確認することはできないが、猫らしき動物が、そこにちよこんと座つていた。

「へえ～、面白そつ

そう呟いた彼は屋上から助走をつけて勢いよくジャンプし、時計塔の窓を突き破つて階段に出た。

そんな様子を見ていた周りのギャラリーからは、どよめきと歓声が上がつた。

そんなことはつゆ知らず、彼が服の埃を払つていると、すでに昇っている人間がいるらしく、上から声が聞こえる。

それを聞きながら彼は面白そうにそのあとを追いかけ始めた。

【時計塔・屋根の上】

「全く・・・ルルーシュの馬鹿が・・・」

ジルは悪態をつきながら猫まであと一歩のところへいた。
確かに猫は、口の仮面を被つている。

「ジル！大丈夫かい！？」

どうやら後ろからスザクも追つてきているようだ。
なぜか真っ赤な顔を反らしているが、そこは放つておこう。

「スザクっ！その猫はジルに任せて・・・」

「女の子にそんな危険なことさせられなによっ！」

「いいからこいつは・・・ぐわあーーー！」

そしてその後からスザクを止めようとしたルルーシュが、バランスを崩した。

「ルルーシュ……！」

それに気づいたスザクは彼を助けるために自身も落ちて行きながら手を伸ばす。

ジルもそれに気づいていたが、流石にここからでは間に合はず、スザクに託すしかなかつた。

しかしスザクはルルーシュの腕をつかんだまでは良かつたが、窓枠に手が届かず、2人一緒に落ちて行く。

「しまつ・・・!—」

スザクは焦つた。

下からも悲鳴が上がつている。

もうダメだ・・・

ルルーシュも、スザクも、ジルも、下にいたギャラリーも皆がそう覚悟し、思わず目を閉じた。

だが2人が落ちることはなかつた。

「おつと危ない

そんなセリフが聞こえ、スザクはゆっくりと目を開けた。

するとそこには彼の腕を窓から身を乗り出して捕まえているレイの顔が目に入った。

その後、レイは2人を引き上げ、ジルは猫を捕まえたが、仮面はすでに外れており、少し下の突起に引っ掛けかっていた。なので猫をスザクに預け、レイと先に下に帰らせ、仮面を回収したのち、それをルルーシュに渡した。

「やつぱりこの前の猫だったか……」

「この前？」

「うん……実は……あつ……」

時計塔から先に猫を抱えて降りてきたスザクとレイに、さまざまな視線が向けられる。

何故か数人の女子がレイの方を呆けた顔で見ていることも付け加えておこう。

そんな状況に耐えかねたシャーリーが2人に駆け寄る。

「ありがとう！ルルを助けてくれて！」

「やるじゅん転校生 - s!」

「LJの猫、なにか持つてたでしょー!?」

彼女に続いて、リヴァルやミレイも声をかける。
それにスザクは少し嬉しそうに答える。

「何か被つてたみたいですけど、よく見えませんでしたし、ジルさん
がこの猫を捕まえたんで・・・」

「ところでルルは？」

「あつ、忘れ物があるから、先に行けって・・・」

「それだあ つーーーあいつの恥ずかしい秘密つーーー！」

「やつこつじですか・・念願・・・・・・

そんなことを話していると、時計塔からルルーシュがジルと一緒に

戻ってきた。

「ねえジル！あなた、こいつの恥かしい秘密見たっ！？」

「ええ、彼が将来を言い交わした相手へのそれはそれはお熱いラブレターが「ジルっ！」『冗談よ！冗談！ルルーシュが言つたら本当に殺しそうなんで黙秘させていただきます』

ジルが適当なことを言つてると、ルルーシュが怒つたので、彼女は笑つてごまかした。

「うう・・・私も見たかったなあ・・・といひあなたは？」

心底落ち込んでいるミレイが、話題を変えて隣に立つて居るレイに目線を移す。

「ああ、彼は僕と一緒に転校してきた友達のレイ・エスターっていいます」

「どーも」

スザクの自己紹介を受けた彼は、いつものスマイルで挨拶をした。

「あなたが転校初日にサボつたって言つ噂の・・・」

「（）これが私と同じ記憶喪失の転校生・・・」

ミレイが何やら興味深そうな顔でレイを見る傍ら、ジルは彼の後姿を見ていた。

「ねえ・・2人つて友達なの？」

「だつて・・イレブンと・・・」

先ほどまで静かだったカレンと二 ナが言った。
そして彼女たちの発言に周りが騒がしくなる

「それは・・「友達だよ」」

スザクが言い訳に困つていると、ルルーシュはそう断言した。

「会長、彼とジルを生徒会に入れてくれませんか？」

「う～ん・・・ジルちゃんはそのつもりだったけど・・・ううね、スザク君には部活は厳しいだろ？」「副会長の頼みとありますやね？」

「あの・・・できれば彼もいいですか・・・？」

そう言ってスザクは遠慮がちにレイの方を見ながら言った。

「えつ？僕？僕は別「もつちろん！じゃあ決定ね！」？」

レイの意見はミレイによつてもみ消され、彼ら3人はこゝにして生徒会に入ることが決まったのであつた。

STAGE 06 【奪われた仮面】（後書き）

ホントはこれ、クリスマスの前に投下するべきでしたね…（笑）
まあ大したことではないんですけど。

レイのサボリ癖はきっとルルーシュよりひどいですねw
もともと彼は集団行動は苦手なんですよ。

そしてジルはどうでしょう？

ルルーシュが好きなのかな？なんて思っている人もいると思います
が、きっと彼女はC・Cと同じような共犯者といった感じなんですよ。

ちなみに二ナはレイに一回惚れしたって設定ですw

えつ？ユフィとはどうなるのかって？

それは今後の展開でw

以上、くだらない後書きでした！

あつ、良ければ感想とかいただけたら嬉しく（殴

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1377z/>

コードギアス 反逆のルルーシュ～銀の翼～

2011年12月27日01時55分発行